

特103

6201

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/_m 70 1 2 3 4 5

始

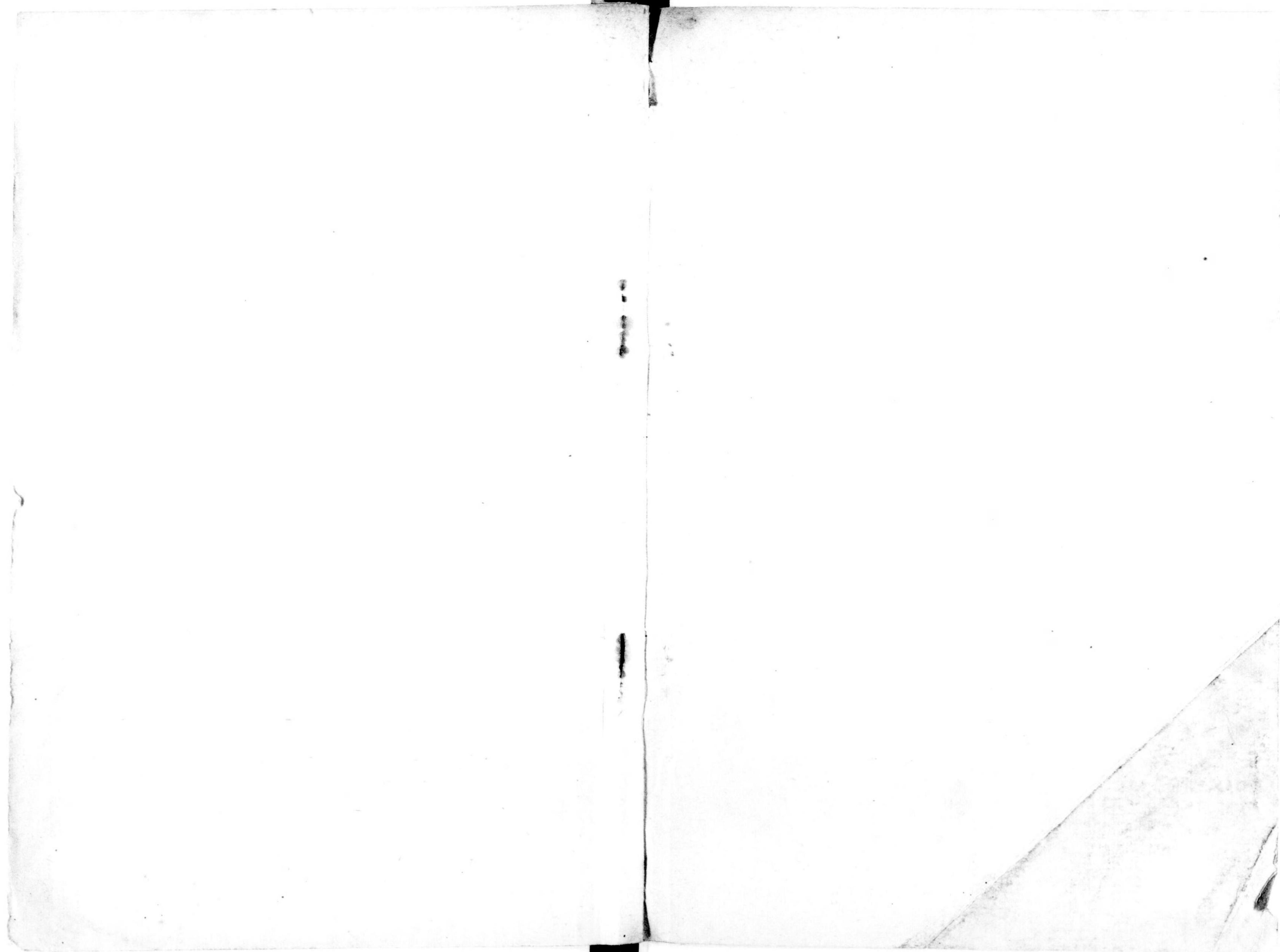




刑臺上の感謝

▽死刑囚山口豁氏の手記

『血と涙の恵』………實記



序

本書の主人公である山口詮君は予にまじりては何の由縁もない他人である。しかし我等の救主なる耶穌基督の贖罪の血を信ずる故を以て、彼を予は血縁の者である。彼を救ひて樂園に伴ひ給ひし主耶穌は予の救主である。主はやがて予を伴ひて彼が居る所に行しめ給ふ事と信じて居る。基督教は議論の上に立らるべきものでない、事實を以て證明せらるべきものである。此教は説明でなく、生命である。山口君の信仰生涯は極めて短かつた。しかし主耶穌の福音の能あることを事實を以て示し、永遠の生命を得て莞爾として死につきし事によりて如何なる反對者も否定する事が出来ない眞の安心を其死を以て證した。

さればかかる事實談は千百の講演又は説教よりも勝れるものである。此度本書を再版するやうになつた事は宜なる事である。本書は忽ち何十版といふやうな際物とは異ふ。しかし末永く多くの人々に讀れ、多くの人々を救に導く好き手引となる事と信する者である。

彼を主耶穌に紹介せし大澤兄は予の同業者である。我等は共に聖書的基督教を宣傳して止ざる者である。彼の信仰に關して記したる本書は我等の力説せる新生、聖化、主の再臨に關する信仰を裏書するところのものであるから、我等は本書の出版について大なる感謝を神に捧げて居るものである。

死際に救を得て永眠したる者はカルバリー山上に主耶穌と偕に十字架に釘られし盗人のみでない山口君の臨終は實に聖書に裏書するところのもので、實に貴きものである。

願くは此書を讀むところの人は悉く彼が臨終に唱へしところのハレルヤ(神に榮光あれ)を叫んで此世を去る幸福なる人となられんことを。

中 田 重 治

大正
12 年 17
内 交

序

私は官選により山口氏の刑事被告事件の辯護に携はつたのである山口氏は刑事法廷に現はるゝ種々雑多の被告の中で毛色が變つて居た警察にあげられた時社會制度の不備欠陥を痛論した爲め社會主義者の犯罪として新聞紙の三面記事を賑はしたが其犯せる罪は單純なる強盜殺人であつたりたて、社會主義など騒ぐ程では無つたのである併し山口氏の性格と犯罪経路とを以て心的變化は普通の被告人と異つて居た裁判の結果は極罪たる死罪であつた私は控訴期間満つるの日に訪れた氏は晴々しい顔して過去の恐るべき數多の犯行に對し社會に陳謝すると共に現在の悶なき此心を又々控訴によりかき亂すことを好まぬ喜んで服罪する旨を語つた人として生に執着せざるものはない假令正當の越刑といへ第一審の死刑の宣告には直ちに服することの出来ぬのが人情である山口氏は全く宗教の力により救はれ罪の死より靈の生に入るを樂んで居たのである氏は死の前に感想と懺悔を書き綴り牧師と私とに殘したそれは氏の偽らざる告白である其中には我々の味ふ可きものが少くないと思ふ山口氏を悔悟せしめ信仰の生活に導き以て永遠の生命を得せしめたる牧師大澤氏の手によりて今其遺稿を公にせらるゝを聞き非社會的犯行を敢てしながら其一面には社會を思ふ念の深かつた山口氏が地下に満足するを思ひ私は欣喜に堪へぬので茲に一言を叙する次第である

大正十年十一月一日

池田 五十

序

余は死刑囚山口豁の最後に立會したる第一人者なりと雖も彼に就て多くを知らず只聞く彼些が學修あり然れども多くの弱點と缺所を有し境過常に否運を脱すること能はず一たび志を立て、大分縣別府ホーリヲス教會牧師大澤豐助氏の門に入り道を求めたりと雖も氏の嚴肅なる提獎に堪はず放浪自ら恣にし遂に慄るべき大罪を犯して囹圄に囚はるゝや彼は大澤牧師を仰慕して熱烈休まず二たび氏に薫育せられて愈々感激する所あり悉く罪跡を露呈し潔く大分地方裁判所第一審判決に服して苟も存するを欲せず彼は其果敢なき生を片淵分監に托して死を待つべく來りて余が管理の下に收容せられたるは本年六月四日午後暮色蒼然たる頃なり爾來十有餘日彼は鞠躬として跪坐し知己に改悔の書翰を發し暇あれば則ち手に聖書を放たず以て其限りなき懊悔を包むに限りなき慰安を以てせり死は眞に誠に人をして道念を啓發せしむるものと謂ふ可し六月二十一日拂曉……死期は漸く迫れり彼之を感知して肅然たり偶々大澤牧師來り訪ふ相見て大に欣び共に最後の祈禱に耽り心禪かに容姿を整へ徐ろに刑場に赴けり余は嚴明に最後の一言を告ぐ彼之を聽て一首の辭世を詠じ恭しく之を大澤牧師に致して死地に就けり矣「それ神は其生たまへる獅子を賜ふほごに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲めなり」と彼能く徹せし者なる乎大澤牧師の風化豈偉大なりと謂はざる可けんや余亦彼の色身を殺して其法身を長養せし所以のものを思ふて自ら慰むる者なり彼に最近在獄中懺悔録一卷あり余未だ之を閱するに暇あらず然りと雖も人の將に死せんとする其言や善し蓋し世を警成するに足るものならん乎頃者同教徒相謀りて之を梓に上さんとする大澤牧師書を寄せて余の序を徵せらる余辭すること能はず彼に就て其梗概を今記し以て序に代ふ

長崎監獄片淵分監に於て

大正十年十一月

秋元 源次郎

序

何の宗教にせよ、それが迷信誤信に非ざる限り、その信仰が偉大なる力を、人生上に現し、養す幸福の鮮少なからざるは、自他の既に認むる所。かつて我が大分監獄に拘禁せし山口諭の如き、亦その一例と見るべき乎。

彼、もと前科数犯の者、強盗殺人の重罪犯人として、最終に當監に入るや、警察署よりは屈強なる警官數人を付して護送し來り、裁判所よりは懲惡兇暴の者特に嚴重なる監視を要す。通知し來り、當監に於ても、充分之が警護檢束に當りしも、爾來日を経るまゝに其の態度從順にして、克く獄則を守り、過去の罪惡を深く改悟せしもの、如く、死生の間立ちて、時に感情の波立つことなきにあらざりしも、直に詫び改めて靜平に復し、係官の顧問にも、滯滞なく陳述して手煩はずなく、かれて覺悟せしものか、死刑の判決言渡を受くるも、這種犯罪人の多くが、控訴上告、只管科刑の逃避を企て、又は一日の生を貪らんとする風あるに引かへ、彼は潔く第一審に服し、過去罪惡の報償として、喜んで死に就かんさせし事、甚だ殊勝に感じたりき。

更に行刑の都合上、彼を片淵分監に押送するに際しても、厚く在監中の恩を謝し、且一般在監者に、我身の上を例示して訓諭せらるべく委囑するに、左の言を以てしたり。

些々たる小事より、由々しき大事生ず。眼前の小罪を輕視して之を慣行する内、いつしか恐るべき大事を敢行し、遂に我れ如き死刑の大鐵槌を蒙るに至る。須く小事より謹み、斷然改悟して速に良民に復歸せられよ。我が身是れ最も著しき現證ならずや。

自ら死を眼前に控へながら、他の在監者の上を思ふなど、予の感ぜし處一二ならず。是れ全く彼が宗教信仰の賜物に因る乎。

予や門外の人、彼の信仰の内容を云爲することを避く。現下の罪囚が、宗教の信念に惠まらるることの大なるを思ひ、這回、彼の遺稿等を蒐めて出版するの計成り、乞はる、まゝに、彼が在監中の一端を記し、以て序に代ふ。

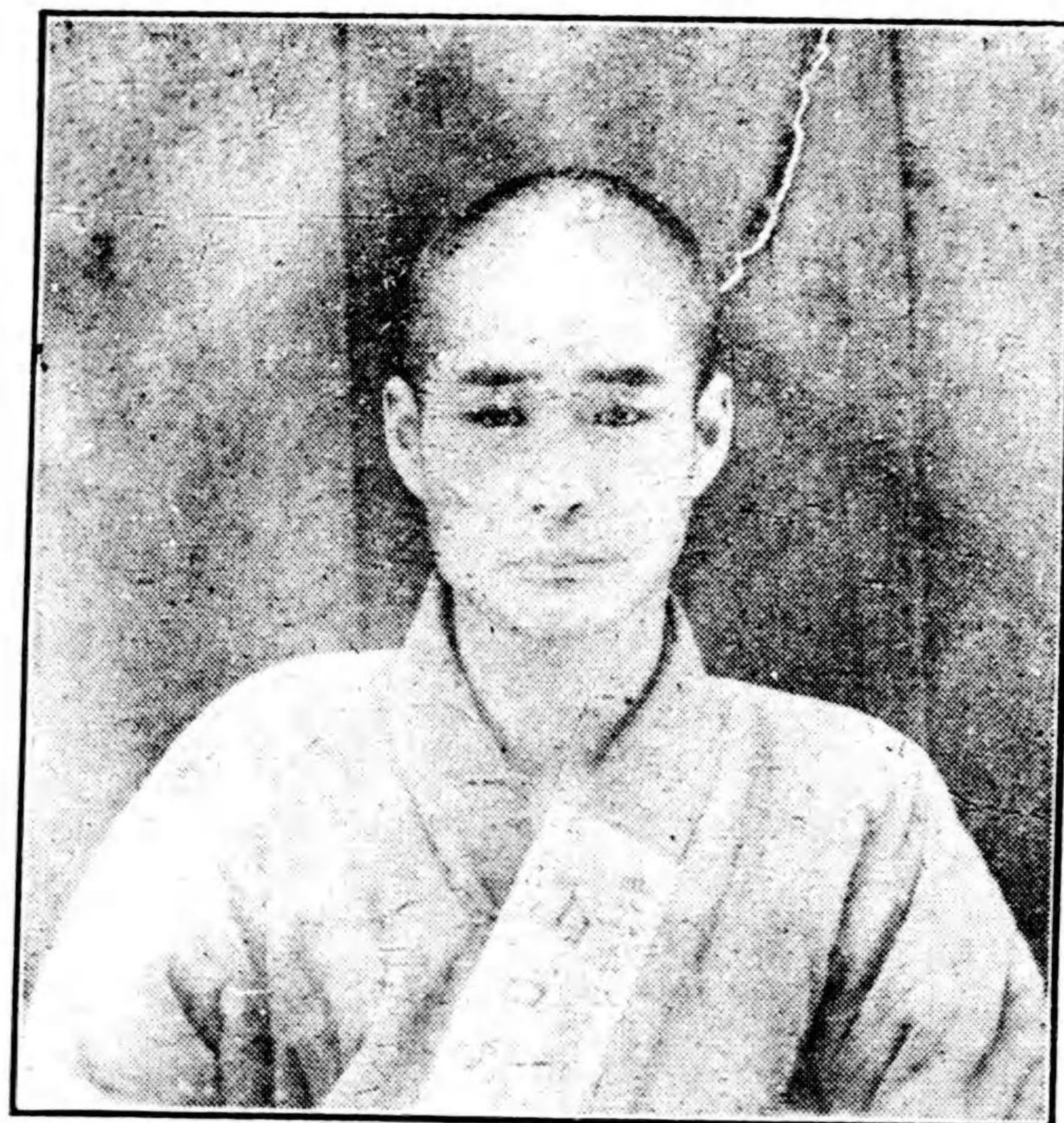
大正十年十一月

大分監獄にて

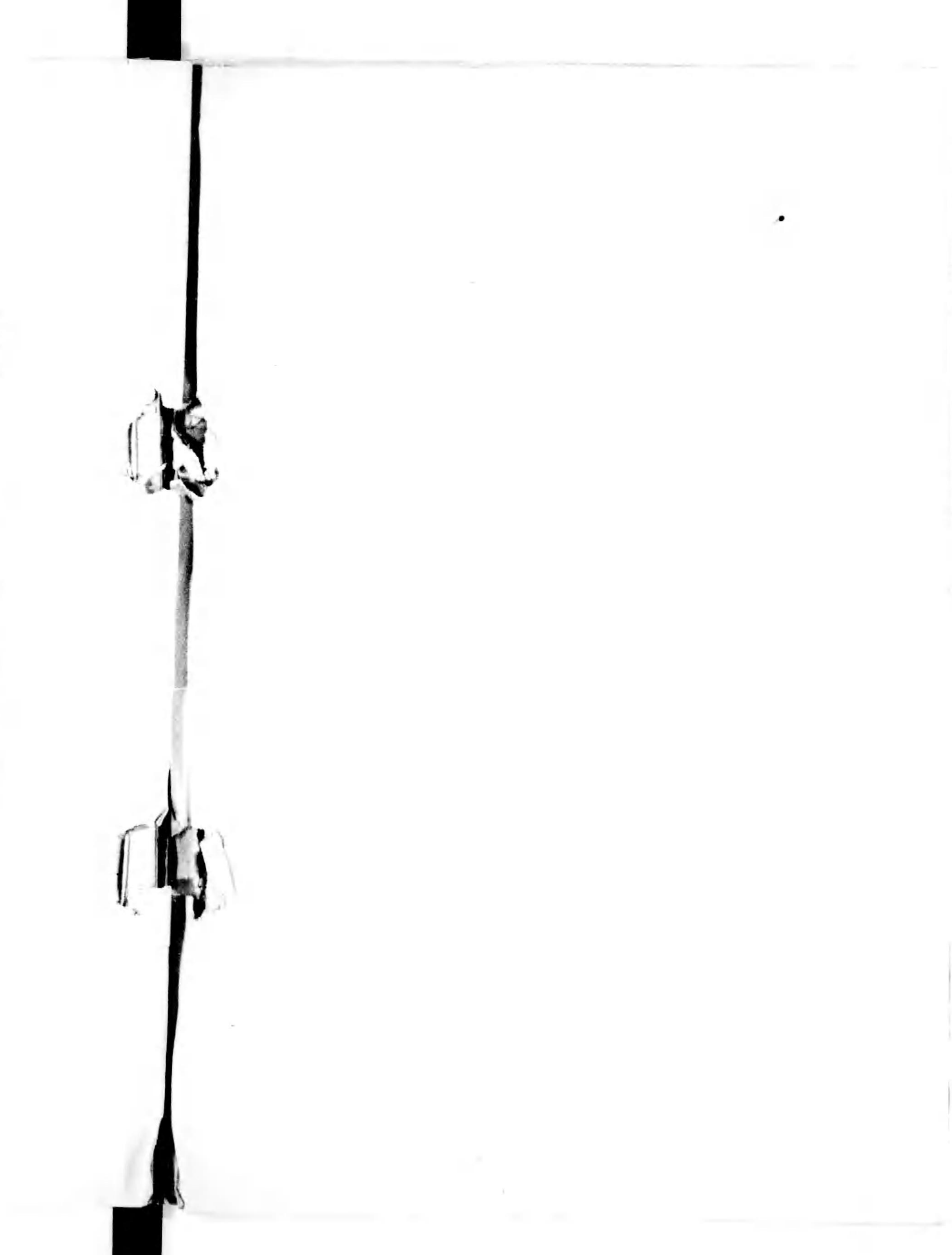
中村基吉

目次

- 一 在獄中の彼……………寫眞版
- 一 彼の手紙と牧師と彼と……………寫眞版
- 一 彼の辭世……………凸版
- 一 緒言……………一頁
- 一 彼の自叙傳……………四頁
- 獄中の述懐……………少年時代……………無宗教の家庭……………青年時代……………墮落書生……………放浪生活……………失戀……………炭坑經營……………懷疑の人生觀……………初めての入獄……………其頃の監獄……………出獄後の悲憶……………無賴漢に頼る……………婦女誘拐……………盜に入る……………獄中讀書に耽る……………温泉場荒し……………慚愧の一夜……………教會訪問……………醜事件に憤慨す……………山口監獄に拘禁……………危險思想に陥る……………減刑の御沙汰……………基督教に心を傾く……………出獄上京……………社會主義に傾く……………再び九州行……………路傍説教をきく……………悔改の祈禱……………不徹底の煩悶……………墮落……………殺人……………良心の呵責……………自暴自棄の決心……………拘禁……………罪の自白……………大澤牧師の導を受く……………救の恵を受く……………死刑の宣告を甘受す
- 一 大澤牧師の話……………悔改顛末……………臨終の有様……………五三頁
- 一 彼の手紙(大澤牧師に送れる)……………七六頁
- 一 編者の附言……………一〇七頁



氏 豁 口 山 の 中 獄 在



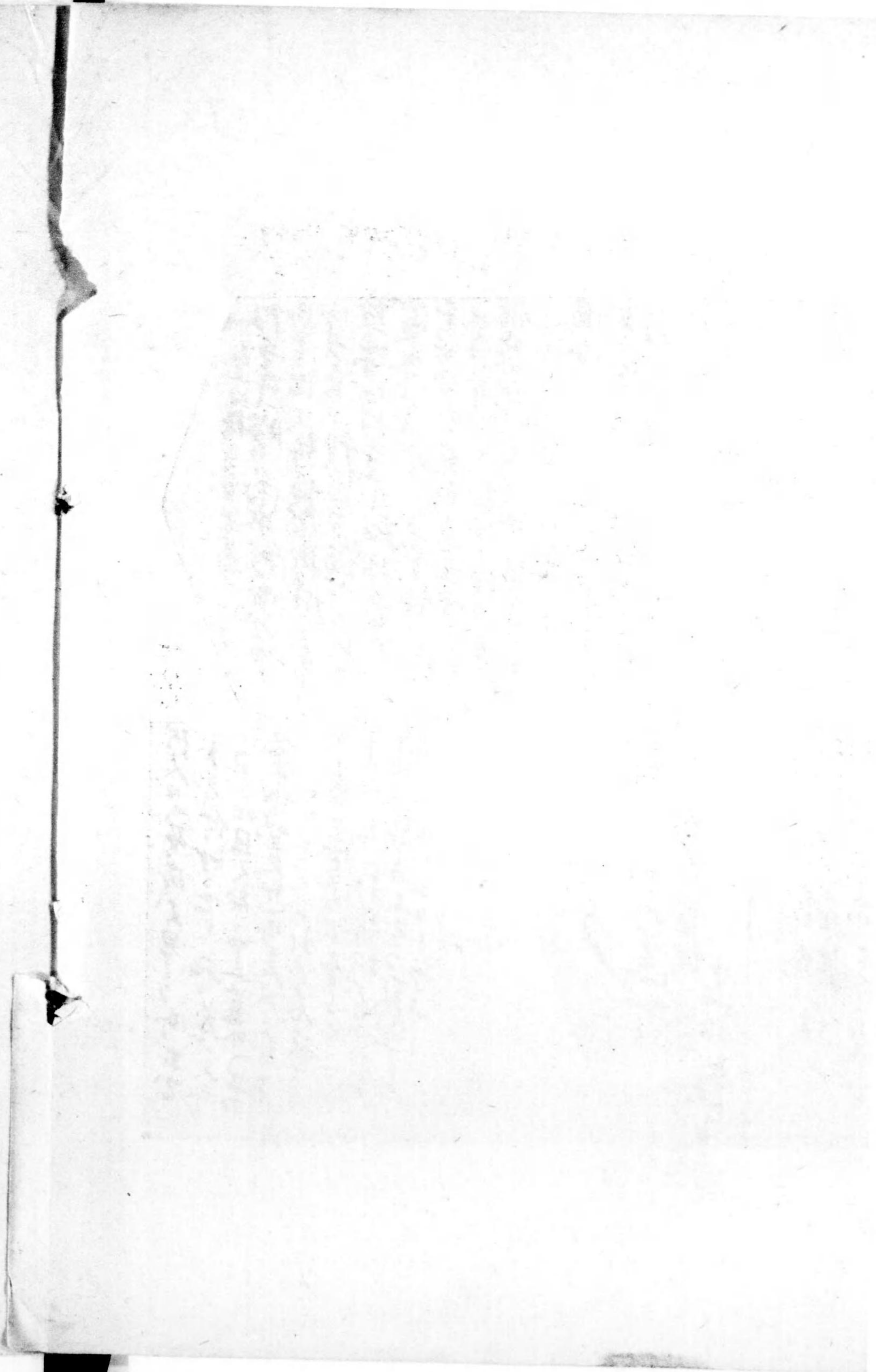


其 印

印

子 子 子

其 印 子 子 子



十
刑台上之
感耐
!

無、頼ぬる

罪人

山口
徳
為

罪の身は

浮世に塵と

成るといふ
心は清き

神の奈城へ

刑臺上の感謝

(死刑囚山口豁悔改録)

緒言

本篇の主人公、山口豁氏は去る六月廿二日、長崎市片淵分監に於て、死刑囚として絞殺臺上の露と消れて終つた人であります。

彼は前科數犯の兇狀持であつた處へ、昨年九月と十月に於て二回居直り強盜を働きたる時、其時二回とも人を殺害するに至つた爲め死刑の宣告を受けたのであります。是より先に出獄放浪中、九州別府に於て基督教をき、同地ホーリス教會牧師大澤豊助氏に導かれて悔改め、兎も角信仰を志すに至つたのです。然し其悔改は不充分であり、

徹底したる信仰をもつ事が出来なかつた爲め、不圖した事から教を離れて元の木阿彌となり、寧ろ聖書にある悪鬼が元住んで居た家に七の悪鬼を連れて歸つたといふ譬にある如く、以前に倍する兇悪性を帯びて斯る大罪を犯すに至つたのであります。

然し捕へられて最後の入獄中、再び大澤牧師の懇切なる教導をうけて今度は眞正に悔改め、彼の靈魂は日に神の恩恵の中に成長し、深き懺悔に咽び、溢るゝ感謝に泣くやうになり、死刑の宣告を受けた者は大抵皆控訴するといふのに、彼は潔よく服罪して控訴せず、かの十字架上の盗人の如く「我等爲せし事の報を受けるは當然なり」といふ態度をとり、一死以て眞の悔改を表はしたのであります、而して彼の死様は眞に美はしいものであります。

極悪無道の大罪を犯せる彼とても、性來の大悪人ではなかつたのです、幼き時より其萌芽はあつたものゝ、不圖した事より道を外れた彼は、水に落ちた人の溺れざらんと藻掻けば藻掻くほど却て沈むやうに、罪に罪を重ねて再び浮ぶ瀬もなき有様に立至り、危険思想を抱いて社會を罵倒し人を咀ふやうになつた彼は、遂に自暴自棄になつ

て斯る大罪をも犯したのであります。

然るに憐憫深く慈愛に富める天の神は彼如き大罪人をも見捨て給はず、迷へる羊を尋ぬる牧者の如くに、迷へる彼の跡を追ふて探し、遂に救の御手を以て彼を捕へ給ふたのです。神の見わざる手は惡に沈み行く彼の上にも常に加はつて居たのであります。

先に好地由太郎氏の「鐵窓の廿三年」出でて後「聖徒となれる悪徒」即ち殺人鬼と稱へられし石井藤吉氏の死刑前獄中に於ける悔改顛末記が世に出ましたが、今又本篇を世に公けにするに當り、

『斯る大罪人でも救はれるなれば、誰でも悔改めて信仰さへすれば必ず救はれる』といふ事を深く感ずる次第であります。

『それ神は其生み給へる獨子(キリスト)を賜ふほどに世の人を愛し給へり此は凡て(誰でも)彼を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり』

(約翰傳三章十六節)

彼の自叙傳

彼は公判に於て死刑の宣告を受け、其控訴期間満つるや、「血汐の惠」を自ら題せる自叙傳的の懺悔録を獄中に於て書き始め細字を以て半紙六十三枚に記したものがあつた。今其中より處々を原文其儘採録する

『キリストの血は……其心を潔むる事をせざらんや』(希伯來書九章十四節)

「我主エスの 貴き血しほ

雪のごとく 我をさへ潔む」(リバイバル唱歌)

噫、私は今日といふ今日、死刑の宣告を受けて、人類として社會の一員たるべき大獄中の切なる資格を奪はれたのであります。私は強盜殺人の罪を犯した極悪無道の大罪人として、刑法第二百四十條を適用せられ、國家社會の安寧秩序を紊し、國民を毒したる兇賊として爰に葬らるゝのであります。これ全く從來の非行に

對する當然の報で、元より怪しむ事はありませんが、思出深き私の人生の幕も將に閉られんとしつゝある今日、つらく過去四十年を追憶し、あたらし此人生の記録に汚点を残して行く事を考ふれば、實に遣る瀨なき痛痕の情迫り來て、抑へても抑へきれないのであります。人は絶對の窮極に立ちて眞面目に自己の経路を反省し、始めて眞の我に立歸ると云ひますが、全く其通りであります。思ひ來れば私は何といふ愚者、又何といふ罪深い者でありましたらふか、從來は全く自己反省の至誠なく、此小い胸で百事を理屈刻みに刻み、此淺い心で妄りに複雑なる人生を憶測して、凡て世の中の事は不眞面目だ、社會は悉く塵埃を以て滿されて居る、凡百事は皆虚偽を以て成立つて居る」と思ひました。

常に不平と失意と煩悶

この三の強き惡魔の爲に苦められ、斷えず懷疑の黒雲を以て蔽はれ、遂に極端なる破壊思想に陥り、凡て罪てふ罪は犯さざるなく、神を瀆し、法に背き、道に悖り、幾回

となく累綫の辱を受けても恬として耻ぢず、跋扈跳梁した揚句、今や罪の重荷を負ふて奈落の淵に沈まんとして初めて自己の滅亡を覺り、悲痛悔痕の手を伸べて此深淵より攀上んとして居るのです。

『身の燈は目なり爾の目瞭かならば全身あかるく、其目悪ければ爾の身も暗し』

(路加傳十一章三十四節)

『愚なる者は己の愆に捕へられ、其繩に繋がる』

(箴言五章廿二節)

省みれば私は慥かに此心靈的没眼漢であります。實に私は痴の極、愚の至、罪人の首であります、聖書には人の罪を示して惡念、姦淫、苟合、兇殺、盜竊、貪婪、惡惡詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄と云はれてありますが、是れぞ全く私の經路を指したものであります。私も平常はあらゆる肉慾の爲に捉はれ、唯盲動的に物質の影を追ふて馳せ廻つて居た時分は、靈魂の事、人生の最大問題に關しては無關心の態度を取つて居たのでありますが、扱てのつびきならぬ

生死の境に足を進めて見るこ

今更生命を惜むのではないが、如何に頑迷不靈の醜漢も、自ら湧き來る罪惡觀の爲に苦痛と恐怖の念に襲はれ、肅然たる此獄室の壁に私の罪惡の一生が彷彿として展開せられ、それが活動寫眞の痛ましい慘劇、恐ろしい地獄の繪巻物となつて、私の眼窩に映じます。私の心身は亂れ、激烈なる熱病に犯されたるが如き感が致しまして、覺めて居る時と眠り居る時とを問はず、

血流れて見るも忌はしき虐殺の死屍！

あの處、あの時の慘憺なる光景！

は寸時も私の心より離るゝ事がありません。

死刑囚！ 死刑囚！

吁、何といふ恐ろしい罪名でありますか、是は必竟私慾より脱せざりし者の滅亡を現はして居るのです。

牆壁嚴然、鐵門深く十重二十重に築かれたる此牢獄に繋がれて、今や混沌たる浮世の夢より醒めたる私は、悚然として懺悔の念肺肝に併り、胸は痛歎懊惱を以て張り裂けるやうになり、私は覺せず神を呼びました。

『神様くごうか私を救ひ給へく』

と絶叫しました。皆様は是は苦しい時の神頼みだと、御笑ひになるかも知れませんが私は自分の犯した重い罪の爲に永劫の暗黒に沈まなければならぬと考へました時に名譽も黄金も野心も、浮世の塵芥は凡て消へ去つて、唯あるものは

神様と私の靈魂ばかり

になりました。ア、神よ私を救ひ給へ、私の望は今全くあなたにありますと、祈り祈つた時に何處とも知れず、

『我汝を救ふ』

といふ御聲を聞く事が出来ました。沈痛明確に、私の意識の上にピタリと印刻を捺さ

れたやうに。そして是迄全く罪に死にきつて居た私も、此刹那、此御聲によりて活かして貰ひました。

是は決して私如き者の柄にもなき悟道でもなく、亦瘦我慢でもありません。如何に傲慢なる此醜奴も、此御聲の前には其頭を下げました。我汝を救ふ、此『我』と『汝』の御言葉が、實に私には難有いのであります、是ぞ永劫に私を憫み索めて居て下された天父の尊い御聲でありました。此尊い難有い御聲を聞いた私は、眼には一杯の涙を湛へ、心は全く砕かれて、十字架の潔むる血汐こそまさしく此極惡の私に對する唯一の救済なる天恵であつたと感得する事が出来たのであります。

永遠の道程に就かんするに當り

私は我ながら實に不可思議なる此事實に驚いて居るのであります。其貴き血汐の御惠

を言ひ顯はして、皆様に其絶大無限なる恩寵を喜んでいたゞきたいと思ひます。

皆様、私とても元々から恐ろしい強盜殺人の大罪人として、此世に生れ來たものであります、生れ出た時には天真無垢の可愛らしい赤兒でありましたでせう。それがどうして今此やうな悪魔のモデルとなり、又其悪魔のモデルがどうして貴き神の御恩恵を受けるやうになつたのでありませうか。其道程を暫く證致したいと思ひます。

少年時代

私は今より四十年の昔、櫻で名高い上野の杜から北に當る日暮里の郷といふ帝都の邊鄙な町で呱呱の聲を擧げたのです、父は越前の鯖江といふ處の小藩の舊士族で、儒教思想で固まつた至つて無頓着な人で、其頃某省に職を奉じて居りました、母は矢張同藩の漢法醫師の娘で、女大學から仕込まれた氣の小さい質の婦人でありました。私は此間に三男として生れましたので、幼兒の時は家庭の愛に浸つて、極めて安らかな境遇に育ちました。

然るに私の稍物心のつく時分から、私の父は職務の都合で地方の官廳に轉ずる事と

なりましたので、私共の一家を提げて、或時は南の宮崎、或時は北の富山といふ案配に、四方に流寓する覇旅の身となりました。

子供の時に敬虔の心を與へざるものは子供の手より大なる寶を奪ふよりも残酷だといふ言があります、全く

無宗教無信仰であつた私共の家庭

は朝に跪坐捧禱の禮拜なく、夕には感恩奉謝の讚美を聞く事が出来なかつたのでありますから、私共は神様の尊い御榮に浴した事もなく、心に神を認めず、之を拜む事も知りませんでした。この人世に於て何等の信仰もなく、宗教もなき無意義な家庭にある程不幸不遇な事は又とあるまいと思ひます。私は愛の真情を發揮した、全家族心を合せ思を一つにして平和な祈禱を捧げ、高尚なる趣味の下に全家嬉々として楽しむ恵まれた御家庭を見ると誠に羨しい感が致します。

父は至つて酒を嗜み、何時も晩酌には獨り杯を含んで、其蔷薇色の上機嫌な顔で子

供等を相手に閑談に耽つて一日の悶を排して居られました。多くは外出勝の事として、子供等の躰方は一切母親任せにしてありましたが、過ぎたるは及ばざるが如しいふ諺の通り、唯偏愛の一字に歸着して何等の誠をも受なかつた私は、十三四歳の頃から母親を瞞着して小遣錢を絞りに出し、密に各種の娯樂場や飲食店に出入し、又は其頃流行した水滸傳や其他の翻譯物の探偵小説を讀耽り、時には其主人公に憧憬し、肝要な學校の教科書は御留守といふ風でありました。一度私が水滸傳を讀んで居た時に、其書物は支那の盜賊團の事を書いた本であるから見ては良くないと叱られた事がありました。

プラトリーといふ人は「子供の些々たる過失は捨て、置くも害なしといふ者があるが些々たる事でも習慣となれば大事である」といふやうな事を申しましたが誠に味ふべき言であります、又俗に『嘘は泥棒の初まり』といふ事がありますが、私の實際を穿つて居ります。

一度親を欺いて

興みし易しと思つた其横着心から、遂に此悠大なる天地間に五尺の身の置處もなく、一生日陰者となり、世にも恐ろしき強盜殺人犯として人々に指彈せられ、今や其大罪の爲に死刑の宣告を受けるに至りました。私は其當時を追壞して實にいふ可らざる感慨に打たるゝのであります。されば聖書には

『もし爾の手なんぢの足おのれを礙かさば斷て之を棄よ、兩手兩足ありて盡ざる火に投入られんよりは、跛または殘缺にて生に入るは善なり、もし爾の眼おのれを礙かさば拔出して棄よ、兩眼ありて地獄の火に投入られんよりは、一眼にて生に入るは善なり』

(馬太傳十八章八、九節)

と説いてありますが、實に痛切なる御訓誡であります。罪惡の微菌が一度身体に取つて漸次五臟六腑に浸入して全体を萎微衰弱せしめ、大切な靈魂を永遠の滅亡に陥して終うのであります。實に最も恐るべく

最も厭ふべきものは罪惡

であります。

青年時代

斯様にして心理上の畸形兒たりし私は、青年時代になりましたから、少壯血氣の妄念に任せて未來の政治家、實業家たらん事を欲し、朝な夕な想を都門生活に馳せて、徒らに私立大學の學帽や金ボタンの制服を羨んで、無理やりに父の許を乞ひ、名譽とか成功とかいふ空中樓閣を心に畫きて、遂に我家を脱して喧噪浮華の都人士と化し、某實業學校に通ふやうになりました。窮屈なる兩親の許を離れ、無拘束なる下宿屋に放縱なる日を送るやうになつた私は、何時しか四疊半裡の灸豆煎餅の御馳走に飽きて、青樓の二階に鮪の刺身や鰻の蒲焼を嗅ぎ出し、惡友に取巻かれて艶めかしい花柳の巷に入出して賣春婦の一瞥に現を抜かし、國許の慈愛深き親が汗膏を流して送つてくれる學資金を湯水の如く消費し、遂に

悖德無耻の墮落生と變じ

て、父母の膝下を辭する時、諄々として慈愛を籠めて説き聞かされた貴い訓誡も、已に煙の消去つた如くに忘れて終ひました。

『その艶美を心に戀ふこと勿れ、その眼瞼に捕へらるゝこと勿れ、その娼妓のために人はたゞ僅かに一摘の糧をのこすのみにいたる、又淫婦は人の貴き生命を求むるなり人は火を懷に抱きてその衣を焚れざらんや、人は熱火を踏てその足を焚れざらんや』

(箴言六章廿五―廿八節)

と聖書にあります、誠に痛切なる御訓言である、今更に思ひ當るのであります。其後一惡友に欺かれて高利貸の連帯金借用證書に證人として捺印した事が大なる禍殃となり、學校から放校される様な不名譽を來し、これが爲に親屬故舊にまで少なからぬ迷惑をかけました。是は神が私を覺醒させん爲の愛の懲治の鞭であつたのでせうが、私は其に氣がつかせませなんだ。其時に目覺めてゐましたならばごんなに平安幸福な日を送る事が出來たでせうに、盲にして愚な私は罪を悔改めやうとはせず、却て

眞黒暗な横道に入り

ました。人といふ者は恐しいものだ世の中の事は決して當にはならぬ、好意を以て献
げた甘き杯に酬ゆるに苦き熱湯を以てせられたと、唯世を憤り人を罵り、東京にも
居られず公然と歸宅も出来ませんから、止むなく遠く長崎に走りました。

其途中慈母の事を偲び、切つても切れぬ情緒にほだされて久し振りにて懐かしき我
家の閨を跨り、密かに母親に對面し、自分の悪い事は棚に上げて眞噓事打交せて夫等
の事情を話しました。兒に甘い母親は非常に驚き且つ歎き、痛く其友人を恨みました
が、何時に變らぬ恩愛濃やかな言を以て將來を戒め、幾分の小遣錢と握り飯迄作つて
下され、

「ごうか見上げた人物になつて歸つて下さい、

假令車挽をしても

良いから決して悪い心を出さずに必ず辛抱して成功するやうに」

とくれぐれも涙を飲んで言はるゝのでした。西哲曰く「母の愛は神の愛に最も近く、
人間愛情の至高なる發現なり然ば母なき處は樂園も變じて地獄となるべし」と。嗟呼、

私は再び此情深き言と此濫かき握飯を戴く事は出来なくなりました。

放浪生活

斯くて晩秋の頃、鐵路遙々九州に向ひ、長崎に着きましてから暫く或知己
の家に身を寄せ、其情誼厚き世話を受けて居りましたが、其頃或目的の爲
に同地を根據として居た露國捕鯨船に乗組員たらん事を申込みました處、時恰かも日
露間に一種の暗流が横はつて居りましたから日本人の乗組を絶對に拒絶しました。其
處で一縷の望も切れて終ひましたから、生計上止むを得ず、同地の三菱支店に勤むる
事となり、やかましい服務規律の下に終日帳簿の裡に首を突込んで、唯機械的の事務
に従事して居りましたが、不圖したる縁故から其社宅に住んでゐた一婦人と知り合に
なり、段々親しくなりましたから、

公然結婚を申込み

ました。當時私も前轍に懲りて大分眞面目に勤めて居りましたから、先輩からも信用
を受け、境遇も稍順境になりかけて居ましたから、都合よく其縁談が纏りかけました

のに、偶々他より邪魔が入つた爲め、無残にも私の夢は打消されて終ひました。

人生の危機、精神の變化動搖し易い青年時代には、何時も危険が伴つて來るので、一步踏み誤れば奈落の底に落ち込みます、もし恐ろしい懷疑思想に犯されて居た人が失戀痴情に捉へられると、凡ての事物は悉く破壊されて終ひまして、あれをやつても厭や、これをやつても厭やといふやうに何事も手につかず、世の中の事が五里霧中になつて煩悶懊惱、失望落膽、遂に人生の興味を失ひ、萎れては自殺となり、破れては犯罪となるのです。

毒蛇手を咬めば壯士其腕を斷つ、其腕の惜しからざるに非ず、全身の腐敗を怖るゝ也といふ誨もあります、御耻しい事ながら私も失戀の毒蛇に咬まれ、懷疑の鬼に誘はれて自己の行爲の方針すら定むる事すら出來ない状態に陥つて終ひました。當時不幸にして

私の父が俄かに病死

しましたが、其原因も一は、私が造り成したやうなものであります。私の素行がよか

らぬ爲に、ごだけ親に苦勞をかけ、親を泣かせたか知れませんが。私は全く精神的に兩親を殺したのです。私の一家は借財の爲めに離散するの悲境に陥りました。其際七人の兄弟は淺間敷くも各々自己の慾望の畜生道に馳り、後に残つた一人の母親に奉仕して家内靜かに團樂の幸福を全うするといふ事が出來なかつたのです。聖書に

「子たる者よ爾曹主に在て兩親に順ふべし、是合宜なれば也、爾の父母を敬ふべし、約束を加へたる誠は之を首とす、これ爾が福を得また地上に壽長からん爲なり」

(以弗所書六章一一三節)

と懇切に孝行の道を教へてありますが、仁愛の出發点は全く親の心を汲むといふ處から出て來るので、親の愛ほど神に近い愛はなく、私共は之を通じて神を知り神に近く事が出來るのですが、私は今更之を想ふて實に情なく、又耻しく人知れず悲の涙に袖を濕ほすのであります。「無き親を思ふ想を在りし世に、持ちなば今の悔なからん」とは能く私の今の心情を寫したものであります。

斯くて堂々たる男子ながら

失戀の捕虜となつた私

は、淫らな肉慾の爲に此大切な靈魂の置場を忘れ、酒を仰いで元氣をつけては惡魔の巢窟に這入り込み、禽獸同様の不行跡をなして僅かに胸中の鬱を晴らして居ましたが斯様な風で勤務の方は怠るやうになりましたから、遂に信用を失ひ、職務怠慢の件で會社を追出されました。

其處で止むを得ず福岡縣に身を轉じ、二三の山師連と共同して小炭坑を經營する事

炭坑 に着手致しました。

經營 名譽を得んとして失敗し、戀を得んとして失敗した私の前には、最早金より尊いものはなかつたのです、世人交りを結ぶに黄金を以てす、黄金多からざれば交り深からずといふやうな事を考へ、黄金萬能、拜金主義者として現實の成功熱に犯され、目的は手段を撰ばずといふ極めて危険な間違つた考を起して、あらゆる權謀術策を弄し、人目を眩して儲けた惡錢で外見を装ひ、汚れ果てたる心に錦を飾つて得々と居りました。當時全く主義的獸慾の結晶として荒み切つて居た私の腦裡には、始

終こんな事が往來して居りました。是は

懷疑思想といふ恐ろしい惡魔の囁言

でありましたが、それが私の人生觀でありました。それは即ちこうです。

懷疑的 此世の中は凡て虚偽を以て満されて居る。基督の教、釋迦の法、孔子の誠、**人生觀** 皆これ人が勝手次第に理屈を並べて拵へた一の標準に過ぎない。考へて見

ると善といひ惡といひ、是非黑白の辨となつて對立する所以は畢竟迷に外ならぬ。神だの佛だのといふものは是れ假定的方便のもので、決して實在の者ではない。こんな事は心の弱い臆病者の藝言に過ぎぬ。況して法律おやで、斯る事は人といふ蛆虫が世渡の都合を計りて勝手次第に設けた活版摺の記録である。人倫五常の利害得失、悉くこれ偽善である。されば自分はそんなウルサイ事に拘泥する必要はない。かくの如き生命を抱いて夢のやうな一生を送るのであるから、善も惡も死ぬる迄である。人が何といはうが頓着する事はない。唯よい加減にやつて行けばそれでよいのだ云々。

こんな恐ろしい觀念をもつて居ました上に、私は

極めて悪い飲酒の癖

がありましたして、十五の時から自分の氣に喰はない事があるか又は少しでも癩癩に觸る事があると、隠れ飲みをやつて一時の酒興に氣を散らして居りましたが、此悪習慣から終生脱する事能はず、其爲に神聖なる良心の芽生は萎薇して遂に殺人鬼となりはて今日此淺ましい境涯に沈淪して居るのであります。其原因は酒にあります。よく新聞の廣告に、大きな盃の中へ家や倉を入れて其を飲んで居る圖がありますが、唯家倉のみならず、大切な身体や最も貴い靈魂までも吞盡し、幾多の災禍が此爲に生ずるのです。之は僅かに一滴の酒が途には人を飲み社會を呑み國家を呑むの大害を醸すに至り、百藥の長などは全くの妄言で、酒は百毒の長であります。近頃禁酒といふ事は世界の問題になつて居ますけれども、未だ徹底した處迄行つて居らぬやうでありますが、眞の基督教では其信仰の立場からやかましく嚴禁して居るのは、然るべき事と思

はれます。論より證據、元を糺せば一滴の毒汁の爲に、今や大切な身も心も呑み盡されて戦慄すべき奈落の底に落ち込む斷崖に臨んで居る私は、何より活きた證據であります。

さて如上の不埒なる心術を以て人を騙り自己を欺き、社會に害毒を流して居た私の罪に對して、如何でか隠れたるに見給ふ神の怒に觸れずに濟みませふか。天罰觀面、私共の經營して居た炭山は元より欺偽的山師的のものでありますから、具眼者から看破されて大打撃を蒙り、忽ち瓦壞するの悲運に迫りました。其處で私共は

債鬼の包圍を受けて夜逃同様

に、皆散り／＼に解散して行衛を晦ます事となり、喪家の狗の如く哀れ墓ない有様に零落して終ひました。其時「小人窮すれば濫す」の例に漏れず、苦し紛れに或處で他初めて人の衣類を持逃致しましたが、直ちに發覺して法に問はれ、窃盜罪によりて重禁錮二ヶ月に處せられ、始めて嚴しい監獄の鐵門を潜りました。是は

初入獄

私の廿四歳の春でありました。

聖書には

『自ら欺く勿れ、神は慢るべき者に非ず、蓋人の播くところの者は亦その穫とこそ
ろと爲なり、已が肉の爲に播く者は肉より敗壞ものを穫とり、靈の爲に播くもの
は靈より永生を穫とるべし』

(加拉太書六章七、八節)

と克く説いてありますが、徒らに世の事をのみ思煩つて、人間本然の靈を眩して居た
私がいかに肉より厭ふべき敗壞ものを穫取つたかを御覽下さい、さて私の境遇に突然
一大變化を來しました。今迄は青天を頭上に戴き、大道狭しと濶歩して大平樂を吐い
て居た身は、忽ちにして天賦の自由を奪はれ、個人の權利など更に認められずなり、
色の變つた衣物を着せられると同時に

獄則といふ凜乎たる鐵鎖を五体に

纏ひ付けられて、身動きも出來なくなりました。一進一退嚮を嵌られた牛馬同然の有

様で周圍の人はといへば官吏を見ても囚徒を見ても皆孰れも鬼のやうに見えて恐ろし
く、搗て、加へて幽鬱な私の心は始終罪の呵責に惱まされ、纏ふて居る衣物を見れば
實に耻かしく四角の格子や鐵の扉を見ると恐ろしくて身慄ひがする。麥飯を食べ
ると何だか厭な臭がして誠に情なく感ずる。二六時中接觸するものは恐ろしい耻かし
い情ないもの許りで、自分の身がどうなる事かと考へて唯取越苦勞のみ致し、一分時
と雖も安き思ひをした事はありませんでした。一夜月の光青白く鐵窓を洩れて我痛ま
しき孤影をば照らす時、そゞろに咽び來る暗涙を禁ずる事が出來ませんでした。

檻の戸に、映る月影さるゝて、浦耻かしき今の儼

とは其時の私の述懐でありました。

然し一日經ち二日經つて段々獄舎生活に馴れて見ますと、蝮のやうに思つて居た囚
徒も親しくして呉れるし、武裝の官吏も懇ろなる導を與へて下さる、麥の御飯も味が
出て來るといふ風で、此別天地の空氣が格別肌ざわりを覺わなくなりましたが、今度
は之と反對に、

折角芽ばえかゝつた良心が癩痺

して來たのです。實に情ないものであります。

其頃は行刑制度も今日のやうに能く完備して居りませんでしたから、監獄は強盜、強姦、放火、殺人といふ恐ろしい罪の肩書をもつた悪徒の俱樂部で、役人の目を盗んでは密かに泥棒術の傳授や、詐欺の研究をして居たのみならず、

監獄

口にするだも忍びざる野獸的の蠻風が頻りに行はれて、互に嫉視反目の餘り、時に血腥い修羅道を現實して居りましたが、特に此地方は有名なる炭坑所在地で、囚徒の過半は命知らずの連中で、そんな連中が幅をきかせて著しき悪感化を興へ居り、殺伐の氣風が漲り、誠にいたましき弊害が潜んでゐたのであります。其方が優勢でありましたから、他の方面より改過遷善の美はしい精神上の糧を興へられましたが、不徹底な注文主義の遺方でありましたから、格別の効果もない有様でありました。私は一度此獄屋の中に起臥するやうになりましたから、自分を圍繞する陋風の爲めに甚だしい悪

感化を蒙り、未だ心の底に残つて居た或よい性情は全く荒されて終ひ、遂に唯一個の

淺間しい劣等動物と成り果て

て終ひました。而して苦しい時にだけ、こんな厭な處には再び來ないといふ極めて薄ぼんやりした考を起して、日々の利益上から打算した表面上の謹慎を装つて居たのみでした。間もなく期日が満ちましたから、此身柄は赤い衣物を脱いで自由になりましたが、私の心は此時から終生赤い衣物を脱ぐ事が出來ないやうになりました。聖書に『彼等其心に神を存る事を願はざれば神も彼等が邪僻なる心を懷きて行まじきことを行すに任せ給へり』。(羅馬書一章廿八節)

とありましたが私は全く醜い精神的亡者となつて彷徨廻はつたのです。

出獄後の悲境

さて出獄後極力奔走して活路を求めましたが、官署は勿論の事、會社の商會等でも私の前科者といふ烙印を見ては相手になつて呉れません。偶々身元を取繕ふて首尾よく採用の恩命に接し、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、古疵露見し

て御拂箱となり、舊知の人々は冷やかな態度で背を向けて居るし、誠に便りない有様になりました。といつて筋肉労働によつて生活の安定を得るといふ資格もなかつたので、ツマリ私に確乎たる自覺と決心が足らず、逡巡躊躇、彼方此方に間諛づいて頭を突き當て許り居りました。一度その

前科者といふ烙印を捺されること

實に慘な者で、到る處に於て嘲笑指彈せられ、手痛き迫害を受けました。其頃は社會の人々が出獄者に對して今日程の同情もなく、第一警察官の干渉が餘りに過ぎて、折角開拓されかゝつた前途も、其爲に遮斷せられるといふ風で、私は一歩一歩人生の陥穽に近いて行くのでした。

扱て又段々町へ這入つて彼方此方を見ると、様々の惡魔の誘惑が私を襲ふて來ます。此方には酒の香がする。此方には艶めかしい女が柔しい言をかけてくれる。又一方には芝居活動寫眞、寄席其他の遊興場が軒を並べて居る、中々面白そうであるから、一

寸覗いて見ると、這入つて見たくてたまらない。人は假面假裝して巧みに慾の綱渡りをやつて居るのが羨ましくなつて來た。意志の弱い私は茲に前途の方針を一變して、

無賴漢に頼る

在監中知己になつた其町の或無賴漢を頼りて、暫く其家に寄寓して居りました。其親分といふのが賭博と脅嚇が職業でありまして、罪なき人の血涙を絞つては、惡錢を掠め遊蕩三昧に日を暮して居りましたが、朱に交れば赤くなるの諺の通り、私も其と一緒になつて、罪なき人を泣かせては世間から嫌はれ恐ろしがられるのを、却て得意として居りました。或町内の若い婦人を甘言を弄して誘惑し、其生家から澤山の金品を引出させたのみならず、其婦人を口説落して無理に自分の妻となし、

浮雲の如き虚榮の夢を貪つて

居りました。斯る兇暴非行が決して永續するものではありません。其中に私の鍍金が剥げまして、前科者といふ汚い地金が露はれましたから、同棲して居た其婦人は愛想をつかして逃出しました。

結婚は人類の大禮で、ごの教でも嚴肅に説かれてありますが、就中我基督教に於ては

『然ばもはや二には非ず一体なり、神の合せ給へる者は人これを離すべからず』

(馬太傳十九章六節)

とあつて、一夫一婦の制を嚴格に述べ、神聖なる結婚關係を教へられてありますが、私はそんな事は少しも考へず、神聖無垢なる婦人をマルで玩弄物のやうに取扱つて居りました今浮世の夢醒め果てたる此鐵窓裡に於て、靜かに神に對して罪障懺悔の涙を献るのであります。(……近頃或堂々たる教育家が、其講演の中に蓄妾の是認を叫ばれて其が問題になつて居るといふ事を聞き、私は覺えず筆を擱いて哄歎いたしました) 無垢の少女を辱めて逃られた私は、懷中也寂しくなり、荒み勝ちの私の性情は一層荒み、恰も嵐に叫ぶ狂浪の如く、

彼方此方と肉の餌食を漁つて經廻り

歩きました。

丁度其頃、一日獄中で知己になつた悪友が私の許へ訪ねて參りました。此人は至つて窃盜術に巧妙な男でしたが、一夜其人と共謀して或家に忍び入り財物を盗みました

盜入る

が、最初の計畫通り甘く成功して思ふ得壺に入つたので、私は是は面白く思ひまして、益々悪事に身が入り、愈々調子ついて來ました。最初は屋内に、足を入れると非常に動悸を覺えて、少しく音がしても胸の中は早鐘をつくやうでありましたが、其都度こんな事ではならないと、殊更に冒險的態度に出で、剛膽力を養つて居りました。すると段々と度胸が据り、今度は却て愉快を感じるやうになりました。恰かも獵師が兎獵でもするやうな氣になつて、巧に交通機關を利用して人の家を窺ひ、夜分は忍び込んで随分手強い兇行を行つては金品を奪取り、そして不義の歡樂に魂を溶かして居りました。

ア、私は既に死の蔭の谷に兩脚を入れて居るのであります。幾度も重い罪を犯しては何時もお酒を飲んで油斷しては逮捕せられ、其都度四年六年といふ長い刑期を申付けられた爲め、大分膺懲の藥が利いて在來の非行に少しく眼が覺めて來ました。然し

永年の悪習慣が痼疾となつて

一朝一夕には脱する事が中々に六つかしいので何か強いものを得て心の治療をしたいものだと思へ、頻りに多くの書物を讀破しました。就中宗教的の書籍に想を馳せて、

獄中 に耽る

佛敎にては清澤、村上、前田の諸先生や、釋宗演、大内居士等の著書、基督敎では梁川、海老名、松村、内村先生や、救世軍の山室大佐の著書とい

ふ風に涉獵し（其他山路愛山、木下尙江、中江兆民、幸徳秋水、徳富蘆花あたりの書籍も愛讀しました）、自然身も魂も潔くなり行くやうな心持がしまして、我身の鐵窓の中にある事を忘れて居りました。幾分か敎化をも蒙つて、無信仰無宗敎懷疑思想で冷却し切つた殺風景な私の心の中にも、幾分の暖か味を催して參りました。然し如何に眞理の籠つて居る書物を讀んで、其理屈を覺えましたも、惜哉私は神の求め給ふものゝ何なるかを知らず、神の御前に跪伏して麻を衣灰に被りて悔改むるといふ事をせなかつたのです。

私の悪事が三犯四犯と重つて、明治四十一年の春長崎の監獄を出ました時は、手に覺いた活版業をやつて居りましたが、一朝自分が計畫した事に失敗して躓くと、例の悪癖の惰力に壓せられて、復私の悪い考がムツクと頭を擡げて來ました。而して今度は

温泉場荒しをしやうと思ひ

豊後の別府へ遣て來ました。同地は日本第一の温泉場だけありまして、立派な旅館が軒を並べて居ります、其處で私は掠めた金で着物を拵け、立派な紳士と化けて或一流の旅館へ投じました。而して彼方此方と其附近を荒し廻つて、諸方から集まり來る浴客の懷中を搜つては流川や濱脇の魔窟へ投込んで、一夜大臣を氣取つて居りました。

慚愧 の一夜

其頃の事、或時満州鐵道の社員の某といふ人と同宿になり、懇親を結びましたが、其人が數百圓の貯金通帳を所所して居るのを知つて悪心を起し、隙を窺つて居りましたが、或時不圖同人の妻君から來た手紙を讀みました。中々敎育ある婦人と見えますが、其書面の中に夫婦の愛情がいかに濃やかに述べてありま

したのを見て、今迄の悪心忽ち消え失せ、大に懺悔した事があります。私は已に相當の年輩であり乍ら度々心得違ひを致し、罪より罪へと愈々深入りを致し、今日迄一日として

人間らしい日を暮した事もなく

剩へ大恩を受けた両親に對しては孝養を欠き、人生の大禮たる結婚の盛典さへ擧げた事もなく、神への奉仕、國家への義務を果さずして浮萍の如き生活をなし、心は私慾に満されたる狂妄者となつて居るが、此夫婦の美はしい交情に對して誠に耻しい事であると、斯う考へました時私の心頭には言ひ知れぬ痛みを覺え、一夜を憂悶の裡に明した事もありません。

又或夜某別荘を犯さんとして、已に兇行に着手せんとする刹那、私の心は不可思議なる恐怖感念に襲はれましたから、忽ち悪事を中止して近傍の教會を叩き、突然其牧師に面會して、基督教の教理を聽かせて戴き、其夜の顛末を自白して救を求めた事もありましたが、多年理屈を以て固めた私の強頑偏屈の頭には、

教會訪問

神様の愛の聖聲も届きませんでした。聖書に『收穫の時は過ぎ夏も早や畢りぬ。然ど我儕は未だ救はれず』とあるが如く、靈眼の閉ぢ切つて居た私は、救の恵を受ける事が出来ませんでした。

偶々其當時かの

海軍收賄事件、引續いて本願寺の疑獄

が起るといふ案配に、我社會に於ては忘まわしき醜態が暴露されました。今迄は國務の衝に當つて居た堂々たる政府の中心人物や、忠君愛國を説いて居た立派な軍人、又眞俗二諦の教理より報恩謝徳の教を垂れて私共を教誨して居た人々の本山の醜くい眞相を見せつけられては、元來批判的に傾いて居た私は、大失望大落膽に陥り、彼等の揚言する忠君愛國を嘲り、偽善の宣傳を痛罵するやうになり、何時もこんな事に目も止まり易い私は、益々反省の念を失つて、嗚呼止みなん／＼と獨り泣きつゝ酒を仰いで一時の快を遣り、僅かに滿腔の不平を抑へて居りましたが、眞面目に仕事を

如何にも馬鹿らしく思ふやうになりました。國家を滅亡に導く者は法律上の罪を犯して懲役何年の刑を受ける常習犯よりも却て廟堂にある上流者である。自己のみ決して罪人にあらず、今迄前科者であるなど、屈して居たのは大間違であつた。世の人は皆美しい顔をした眞黒な罪人許りだと考へて仕事も手につかず、依然として彼方此處と放浪して居りましたが、亦もや自己の求めた生活難の爲に犯罪を致し、八年といふ刑を申付けられて

山口監獄に拘禁

されました。

危険思想に陥る

其頃私の腦裡に斯んな事が浮びました。法律といふものは人が編み出したものだから、絶対に完全といふ譯にも行かまいが、今日の收賄事件の成行から考へるとズルイ奴は網に入らず、馬鹿正直な者のみ拉せられて其醜を曝らし、大盗免れて小盜縛せしむといふ實狀である。此有様では堂々たる法律の權威も歎かばしい事には人爵や勢力の前に屈して居るのか、昨日迄我等に眞面目臭つて報恩謝徳の

教を説いた教誨師を派遣せる本山の樞要人物が繩付となつて行くあの有様は何である親鸞上人や蓮如上人は定めて地下で泣いて御座らふ、斯んな風では全く我々と同罪である。宗教家も當てにはならぬ、法律などいふものもよい加減のものであると譏つて居りましたから今度は監獄に入つても最初から高をくゞつて官吏のいふ事などは冷やかに聞流し、兎角服従に欠け、其行爲は知らず、兇暴性を帯び、時には重い獄則の處分をも受けて、嚴重なる警護を施されて居ましたが、私はそんな事には一向痛痒を感じず。

極端なる破壊主義者となりて

無暗に社會を罵倒し、悔悟反省の念は更になく、最早濟度す可らざる罪奴となり終りて居りました。

減刑の御沙汰

然るに斯る大罪人も、大正四年十一月の御即位の御大典によりて減刑の御沙汰を拜しました。其爲め今迄は枯木同然な私も、幾分か春の生氣を覺

いものだ、それにしても今迄極悪の經路を踏んで來た私、十數年の長い間心身に纏ひついて居る此犯罪といふ惡癖から脱却するには、余程の努力に俟たなければならぬ。生活上の責任といふ重荷を負ひながら、其上前科者といふ深手を受けて居る身を以て、波瀾萬丈の浮世の渦中に再び此身を投ずれば、又もや前回の轍を踏まなければならぬ、如何にしたらば坦々たる本道に出られるであらうかと、いろ／＼に考へた上句遂に私は

基督教に其道を見出し

ました。それは基督教が他の教と異なつて、過去二千年間に手痛い迫害を受けて精鍊され多の殉教者を出した生た宗教であるから、此中には何か立派な賜があるに相違ないと思ひましたからです。其處で聖書を繙いて見ましたが、また是を神の默示として受け、十字架の血によりて潔められるといふ資格はなかつたのです。物質間に失敗した私は基督教といふ美名を以て前科者といふ垢を色取つて、今度は精神界で名譽を恢

復して一成功し度いものだと、日夜幽室の扉に身を凭せては、唯夢のやうな空想に耽つて居るのみでありました。

愈々出獄の身となりましてから、私は直ちに東京に向ひました。汽車は前途の希望

出獄

に燃立つ私を乗せて、鐵路遙々東京の中央停車場に着きました。永らく

幽獄の生活をして居た私には見る物聞く物皆新しく、一見社會は急轉直下の勢で進歩して居る事が解りました。天空に聳ゆる五階六階の洋館、黒煙を吐き乍ら林立する烟突、赫々たる無数の電燈、從横に交叉する坦々たる大道、群集又群集の電車、疾風礮を蹴る自働車、流石は文明の精華を以て誇る帝都の盛觀であると思ひました。然し冷やかに其真相を看破するに及んで、人心の醜惡さに驚き、平和を假裝して居るが垢だらけの姿が出獄者の私の眼に映じたのです。自分が汚れた身心と、時代遅れの智識を以て居る事に氣がつかず、唯時世が容れてくれぬ、親族が馬鹿にする、官吏の態度が面白くない、宗教家が冷淡であるなど薄志弱行者流の褻言を吐いては、獨り快々として悶けて居りましたが、

何時しか社會主義といふ

立派な學理に其名を籍りて居る改革説に動かされました。そんな不健全な思想に驅られて人生の秩序道義を無視するやうになりました。然しそんな事では中々安心が出来ません。聖書に

『愚かなる者は心の中に神なしといへり』

(詩篇十四章一節)

といふ言があります。私は何といふ大馬鹿者でしたらふ。自分の罪惡の雲を以て無理無体に神なしと覆ひ隠してゐましたが、内心は何時も疑惑恐怖不安に襲はれ通して丁度盲目の如く何かを索めんと探りく、蹣跚ながら暗路を辿つて居たのでありました。

私は何んだか都會の空氣を呼吸して居るのが息苦しい感じがしました。嗚呼人生はつまらぬ物だ、人は食ふ爲に活きるか、活きる爲に食ふのか、衣食に奔走し狂ひ廻つて居るが一体何を爲ん爲か、一度人生の眞諦を悟り來れば、

戀も、名も、金も、水に浮ぶ泡沫

より果敢なきものであると、斯う考へた時にもう何事も手につかず、總ての判斷力がなくなり、自己の存在すら忘れる事もあり、只茫然として飲んだり食つたり呼吸して居る斗りでありました。

私は遂に堪にきれないから、逃れるが如く紅塵の都を飛び出し、暫く幽寂の境に身を置いて幾分にも慰安を得んと、或時は鎌倉山の星月夜に壤舊吊古の詩情を養ひ、或時は奈良の古都に超然として夢玄の境を偲び、暫くは纏綿する苦痛を忘れて居りましたが、然し静かな境を離れて亦もや雑沓の地に身を置くと元の默阿彌であります、何事も心を慰むる者としてはなく、相變らず肉慾に居つて一時の快樂を見出して居りました。聖書に

『心の清き者は福なり、その人は神を見る事を得べければ也』

とありますが、心さへ潔かつたならば、身はどんな境界にありましても盡きぬ歡喜と

平安を以て充たされて居る事が出来ましたらふが、心の濁り切つて居た私は、何處へ行つても平安の地を見出す事が出来ませんでした。

再び九州行

そんな風で再び住み馴た九州に足を向け、又もや別府の或旅館に一泊しましたが、夜床に就いても胸の底には罪惡の響がして眠られませんが。散歩でもして氣を紛らせようと、温泉氣分の溢れて居る町の夜景を見物し乍ら段々杖を曳いて松原公園に差かかりました。すると交番所の傍に人が大勢群集してゐましたから私もツイ好奇心に驅られて何心なく近寄つて見ますと

讚美歌の聲がする

のです、其聲は何ともいへぬ慰を與へてくれるやうな氣が致し、あらゆる劣情は洗去られ私は身も心も溶込んで唯恍惚として聞いて居りました。懸て御説教も終り、トラクトを戴き聖書一冊を購つて歸りましたが、トラクトを讀んで大に得る所があり、強い力を與へられたやうな感を感じ、感謝の祈を献げて安らかな眠につきました。

翌日直ちに私は其教會を訪れ、牧師の御方より教を聞いて見ますと、其教會は純福音を宣傳する潔き團體で、私と同じやうな徑路を踏んで來た者も其教會で救はれた事ある事を知り、四面楚歌の中に唯一の味方を得たやうな氣が致し、私如き者は斯る教の力でなくては救濟せられる事は六づかしい、私如き者が斯る有難い教をきく事が出来るのも何かの御導に相違ないと思ふと、今迄の暗雲少しく破れて一閃の光明が放たれたやうに覺えました。直ちに

神の御前に進み出で

何もかも赤裸々に懺悔告白して祈つて貰ひました。爾來覺束なくも聖書の研究を致し悔ひ 朝晩の祈禱も缺かさず致して居りますと、暗い魂の奥にも何となく神々改め しい光が輝くやうになりました。

然し『我願ふ處は我之を行さず、我惡む所のもの我之を行せり』といふのは、私が信者になりましてから人知れず苦悶して居た實感であります。朝起きる時は其日の爲

に立派な祈禱を献げて居りますが、間もなく少しく人から氣に入らぬ事を言はれたり仕向けられたりすると忽ち不平が起り、腹が立ちます。自己の立場を考へて外面は何氣なく装ふては居りますが、心の中では悪魔が荒れ狂ふて、朝祈つた時御目に懸つた神様の御姿を見出し得ないといふ情ない有様でありました。自分は救はれて惠を受けた信者である積りでありましたが、退いて考へて見ますと、反つて其と反對の行動をやつて居る、全く潔い者となつて居りません。私は全く

名前許りの信者で贗物

でありました。聖書に叶つた事は一も履行して居りません。

私は又自分の周圍に注目し出したのです。そして或教役者の態度に失望したり、偽善の信者に不平を鳴し、こんな皮相的事に氣を留めて信仰は段々と衰ひて來ました。丁度彈力を失つた護漢球の如く、靈的の力は消散して終ひ、折角凡の事に興味を以て遣つて居た者が、こうなつて來ると何をしても一向氣乗りがしない。こうなつて來る

ど、私の快樂は極めて低級の慾望、即ち飲食や淫慾より外にありません。私は反撥性の罪惡を今迄基督教の教を以て無理やりに押へ付けて居りましたが、其力が弛むと直

墮落

ちに潜んで居た罪がムツクリと頭を擡げました。是迄は壓迫力が強くあつた爲め罪惡の猛火は一時に爆發致しました。そして私は此世の中の總てを呪咀しました此上は徹頭徹尾自己の思の儘をなさんと欲し、狂と呼ばれ賊と稱へられても人の評に任せ、男子芳を千歳に遺す能はざれば、醜を萬年に留むべしといつた様な至つて不健全な合理的思想の上に、一時の激情に驅られ、唯一篇の私慾を遂行せんとして狂奔するの余り、遂に眼が眩んで

殺人

兇刃を振つて無辜の人々を慘殺

するやうな事を仕出來して終ひました。被害者はいふ可らざる悲憤を呑んで斃れ、それが爲に平和なる家族の團居をも破つて終ひました。「編者記入。彼は九年の九月下旬の或夜、福岡縣の或町の飲食店に忍び入り、手提金庫を窃取して持去んとした時、主

人が眼を醒して引捕へんと背後より組付いたのを、所持の出刃庖丁を以て斬付け、之を殺して逃亡し。其翌月大分縣佐伯町の或旅館を襲ひ、二三宿泊人の金品を窃取した際、又々彼を捕へんと背後より組付きたる一人を短刀を以て刺して即死せしめたのである。』聖書に

『凡て責を受べき事は光によりて顯はるゝ也、蓋凡を顯はすものは光なれば也』とありますが、私は自ら欺いて此光を覆はんとしても到底覆ふ事は出来ません。内心には何時も深刻な痛みを感じて、他人の知らぬ何物かの呵責を受けて堪へられませんから、例によりて酒の力を借りて暫く其を紛らし、酔ふては叫び、醒めて狂ひ、狂つては全く無秩序の狂妄的行動を取つていましたが、嚴重な警戒線を潜つて脱けつ隠れつ此處迄は來たものゝ、始終

被害者の恨を含んだ顔が

眼先にちらついて、何者か何處迄も何處迄も私を逐ふて來るやうな氣がして碌に眠

る事も出來ず、夜更けて人静まりたる時は其何者かの爲に恐ろしい威嚇を與へられまして、胸は張裂けるやうに七轉八倒の苦を致し、いつそ自殺をしようかと思ひました。然し今更ヒステリー性の婦女子の様な厭世的な意氣地のない眞似は出來ない。宜しく我最後の目的は須磨にあり、表に華麗宏莊なる別莊を構へ、其時には不潔なる罪惡を藏して居る世の富豪運に一大鐵槌を加へて、冥途の道連れにせんものぞ、態々須磨迄追遣つて來て或旅館に滞在し、常に附近を徘徊視察し、其問酒に親しんで機の來るを待つてゐました。然るに天なる哉命なる哉、危機一髪の場合に臨檢の警官に怪まれて拘引せられ、其時署長の取調に對し酒氣を帯びたる儘元氣に任せて大氣焔を吐いた爲め益々不審を抱かれて、夫れから嚴密なる訊問を蒙りました。最早其時は數日間監房に入れられ、静かな處に隔離せられて居て漸く精神が静まつて來ましたが、精神が靜まると不思議な事にはアリアリと

自暴自棄
決心

神様の囁きが聽ゆる

私は此時始めて私の爲に泣いて居て下された親しき親様を識り、其親様に面會する事が出来ました。爰に至つて如何なる偏見頑固な私の頭も全く碎かれて終ひました。私は今迄抛つて置いた聖書を再び繙きました。

「只キリストイエスの贖に頼り神の恩を受け功なくして義とせらるゝ也」

(羅馬書三章廿四節)

といふ事が沈痛深刻なる生る十字架として、私の眼前に輝き出ました。そして先に唯倫理道德の書として捨てたものは、今は大生命なる神の默示となりました。私は十字架の恵を受く架を仰いで聖書を読み、仰いで聖書を読み、油然として湧き出る感恩の情に涙ぎても涙ぎ盡せぬ我罪障の涙に袖を濡ほして、此密室で一切を神に打明けて祈つて居ります。

今日では昔の不平不満も夢と消え失せて、罪の重荷は卸されて終りました。此一坪位の暗い處に起臥して苦しい死の問題を前にして日々不自由な拘束を受けて居る身が、蒼々たる天を戴き垣々たる道路に大手を振つて我儘三昧な日暮をして居た時より

も、却て清快を感じ、不味い麦飯、冷たい白湯も實に甘く戴く事が出来、

言ひ知れぬ感謝

の中に満足な日を送らせて貰て居ます。神様に對して赤裸々に自己の罪惡を一切告白死刑の宣告を受て、一審の御判決を至當として慎んで死刑の御宣告を甘受致したのです。よく控訴もせず上告もせず潔く服罪した、神妙な男である、判事辨護士からも言はれましたが、弱い私のする力ではありません。神様が私の祈に答へ給ふて神の爲し給ふた御工であります。ハレルヤ

私は今心の裡に翳す雲もなく、光風霽月、此牢獄の壁も私の心に來る神の光と平和を妨げる事は出来ません。

嗚呼、何たる光榮でありませふ。此罪人の首なる私さへも、今祈るべき訴ふべき濫情慈愛の神様の御膝元で、而して私の靈魂は聖靈によれる光と愛と喜に満されて、ア

父の親しき御導きに託ねて、懸て美はしき永遠の天の都へ到る事を待つて居ます。

一、つみのけがれを

あらひきよむるは

エスキリストの

血しほのほかなし

二、天のやすきを

われにあたふるは

エスのながせし

血しほのほかなし

三、あまつわが家に

かへりしのちにも

よゝほめうたはん

血しほのいさほし

(リバイバル唱歌
三十九番)

を萬唱し、讚美感謝する事を禁じ得ない次第であります。アーメン

僅んで聖恩を感謝し、我恩師大澤豊助先生に献す

大正十年四月廿七日控訴期限満了の日起稿、同年五月廿五日記了る。

大分大道の鐵裡に於て 罪奴 山口 裕 (捺印)

大澤牧師の話

左は大澤牧師が或席上に於て山口氏を導かれた顛末、及び親しく其臨終の有様を
目撃せられた實見談をなされたのを筆記したのであります 編者

私が九州別府に傳道開始の任命を受けて、同地に遣はされたのは、九年の三月である。當初或同業者と一緒に祈つた時、其兄弟が五日間毎日のやうに一人の靈魂を與へ給へと祈つてくれた。私は出来るだけ多の人を導きたいのに、其兄弟は先づ唯一人にも確實に救はるゝ靈魂の起らん事を熱心に祈つて居たのである。其兄弟の祈禱は空しからず、暫くして私は類稀なる大罪人を導くやうになつた。

六月の或夕の事、私其數人の者が

松原公園に於て路傍説教をしたが、説教終つて歸らんとする時、聽衆の中より一人の人が進み出で「御苦勞様でしたね」と私共に挨拶するのであつた。こんな事は稀しい事で、基督教に好意をもつて居る者でなければせない事であるが、聞いて見れ

ば其人は未だ信者でも何でもない。翌日來訪するやうにと約して、其晩は別れたが、翌日約束に従つて私の宅へ訪ねて來た。見た所相當の年輩で、中々理屈をいふ男である。ヤレ労働問題がどうの、社會問題がどうのと、一人で滔々と論じ立て、居る。

「君は一体社會主義ですか」といふと、

「然うぢやありませんけれども、ならずには居られんぢやありませんか」といふ答であつた。私は暫く黙つて聞いた後、今度は私の番だから少し私の話もきいてくれといふのでキリスト教の事を搔摘んで話した。神様の事、人の罪の事、キリストの救の事等を話し、殊に馬太傳十一章廿八節の

「凡て勞れたる者又重を負へる者は我に來れ、我なんぢらを息ません」

といふキリストの言に就いて説いた。すると其人の曰ふのに、實は私は昨晚遊廓に遊びに行く爲に一仕事をしやうと思つて居ましたが、公園で御話をきいて居る中に、出來なくなつて其儘宿に歸りましたとの事である。「仕事とは一体何です」と問ふて見て喫驚した。其は泥棒の事であつた。尙其人のいふのに、

■實は私は前科五犯、在監十六年の前科者で、此間山口監獄を出てから東京に

行つたのですが、詰らぬから別府に來た處です、信仰すれば誰でも救はれますか」といふ事である。私も二度喫驚したが、「それは救はれますとも」といつて、尙詳しく福音の道を説いた。然るに其兄弟は其場で、眞に涙を流して悔改めた。是が私が山口豁氏を知つた初である。其後彼は非常な墮落をしたのであるが、其時には慥に悔改めたものだ、今でも私は信じて居る。唯救の恵が充分徹底せず、殊に罪の性質を潔められるなどといふ恩恵の深みに進まなかつた爲に、彼の衷に深く根を下ろした悪習慣に再び囚へられて、可哀想に再び悪魔の奴隸となり、以前に倍する犯罪を敢て行ふやうになつたのである。

さて山口氏の其迄の徑路については、彼の懺悔録にも記してある事故、成べく重複を避けて、唯肝要の事のみを御話したい。彼が第四回在監當時、頻に宗教書類殊に佛書を研究して模範囚人となつた事もある、然るに彼が出獄した後、社會には海軍收賄事件、引續いて本願寺疑獄事件など忌はしい事件が起つた、彼は是を見て非常に失望

したのが、その心荒み、思切つた罪惡を犯すに至つた重なる原因である。かくして彼は又々獄中の人となつたが、時恰かも御大典に際し、八年が六年の減刑となり、是に感激した彼は獄中に於て基督教を研究し、出獄後は眞面目な世渡りをせやうと思ふやうになつた。出獄する時、獄中で働いて儲けた百圓の金を持って東京に出で、宗教的感化を受けやうと思つて、或労働寄宿舎のやうな處に行つた。處が今日は彼處に行け、明日は此處に行けと唯追使はれる許りで、面白くなく思つて居る處へ、或日の事墓口を忘れて外出したが、歸りて見ると失くなつて居る、其事を話すと、「此處は泥棒をするやうな人許り來る處だ、自分で氣をつけなければ仕方がない」と相手になつてくれぬので、そんな處に居ても詰らぬと思つて直様飛出し手近に兄の宅を見出して其處に暫く居たが、其處からも金百圓と高價な掛物を盗んで逃出し、鎌倉に行つて

■社會主義者大杉榮を訪問したが、生憎留守で遇ふ事が出来なかつた。其から百圓を使ひ、別府迄來たが、金が失くなつて終つたので、又やつてやれといふ處を丁度路傍説教を聞いたのであつた。彼は眞に涙を以て悔改め、何とか眞面目な人になりた

いこの事であつたから、私は數日私の家に置いた後、長門の本間俊平さんの處に紹介して遣らうと思つた。本間氏は世人の知る如く、大理石發掘事業を行ひながら厚き信仰を以て無賴漢などを感化して居らるゝ有名な人である。山口を其處に遣らふと思ふたが、立派な扮装をして居るのに、旅費が二圓しかないといふ。私も當時二階住ひをして居たやうな有様で、物質的には少しの補助をも與へる事が出来ぬ。其處で彼の羽織を質屋に持つて行つて七圓借りて來て遣つた。其外に小説本屋に保證金として預けて置いた一圓(彼は小説本屋に一圓を預けて置いて、種々な小説本を持歸つて晝間は其に讀み耽つて居り、夜分になると稼ぎに出る筈であつた)其を持つて長州に出懸ける事になつた。

私の家庭では大抵の基督信者が行つて居るやうに、毎朝家拜を行つて居るが、山口氏が長州に向けて出發する朝の家拜で讀んだ聖書の言は「後を顧みる勿れ」といふ言であつた。私は停車場まで見送りに行つて「後を顧みる勿れだ、一生懸命に遣り給へ」といつて、握手をして別れた。ところが數日後ハガキが來て、本間さんの所では私を

受納れて下さらぬので途方にくれて居ると書いてあつた。其後又數日すると、本人がヒョッコリ私の二階に戻つて来た。「昨晚歸りました、意氣地がないと思召すか知らんが歸つて来ました。實は私も途方にくれて、馬鹿らしい、やつてやれといふ氣になつて、また悪事をせやうと思ひましたが、『後を顧みる勿れ』といふ言が胸に浮んでどうしても出来ません。」といふ話である。食事は未だであるといふから、一緒に御膳を食べ乍ら、「ナニ神様を信すれば何とかして下さるさ」と話して居る處へ、一本の手紙が私の許に來た。それは近頃導いた青年が死ぬ時いろく世話してやつたので、其人の父親からの禮狀である。中に爲替券が一枚入つて居たので、私は氣輕に「ソレ此通りでせふ」と、其爲替券を示し乍ら、中を開いて見ると五圓か十圓と思ひきや、意外にも百圓の爲替であつたので、私も一寸喫驚した。食後私は用事があつて一寸外出したが、其百圓の爲替を銀行から受け取つて來た其儘机の上に置き忘れて出て行つて終つた。途中でハツと思つたが、其儘用事を済して歸つて見ると、金子は其儘あつた。後に解つた事であるが、此時彼は私に全く心を開いたやうである。私としては置忘れ

て外出したのであるが、前科數犯の彼、殊に暫く前に彼が兄の金を百圓盗んで出た事を知つて居る私が、其金子を其儘其處に置いて出たので、彼はヒドク其を感じたと見ね、其後各所で其事を人に話したそうである。

さて彼は暫く私の家に居たが、前科者である故に何處へでも世話するといふ譯には行かず、埋立工事の人夫に遣る事にした。私の古い洋服など着せて遣つたのであつたが、數日後私は夜遅く其人夫部屋を訪問した。私も人の悪い事をするやうであるが、先づ其處へ入る前に障子の穴から室内の様子を覗いて見ると、皆賭博を打つたりなどして居るのに、山口は隅の方に蒲團を被つて聖書を讀んで居た。是なら大丈夫と思ひ、「御免」と戸を開けて入つて「山口といふ方は居ませんか」と尋ねると、「ヤ先生こんな處へ御訪ね下すつてどうも恐入ります」といふ譯で喜んで迎へてくれたが、私は暫く旅行して來る旨を語り、我慢して働くやうに勸めて歸つた。其後私は旅行から歸つて見ると、もう其處に居ない。其中に彼からのハガキが來て、彼處は逆も誘惑が烈しくて居られず、とうとう逃げ出し、今は或山の中で働いて居ますとあつた。處が其後

暫くして又歸つて来た。山ではダイナマイトを以て石を割る仕事をして居たが、馴れぬ仕事で迎も遣り切れぬ。一ヶ月働いてやつと五十銭しか残らぬ、五十銭人から借りて漸く歸つて来たといふのである。私は何とかして遣りたいと思ひ、今度は或花屋に奉公させた處、忠實に働いて居た。處が九年九月私が旅行中、家族から、山口がまた逃出したと通知して来た。歸宅して見ると、彼からハガキが来て居る。私はとても信仰生活は送れません。

■元の木阿彌になるから左様御承知 下さいといふのである。私は此通知を見て非常に悲しみ、彼の爲に祈つた。其後暫らくしてから、其花屋に泥棒が入つた時、刑事が私の處などにも来て調べて行つたが、花屋の主人は決して山口ではありませんと断言した。此花屋の主人といふのは、農學校出身の面白い人で、山口の事について私にいふのに「あの男は感心な男でした、私は毎晩晩酌する時に飲めと勧めますがどうしても飲まず、喫煙もしませんでした。貴方が餘り堅い事を御仰るから遣り切れなかつたのです。一体貴方が餘り六つかしい事を御仰るから貴方の教會が繁昌せないので」

と、大に私に注意した譯である。其は兎も角、此主人の話によつて見ても、彼が實際眞面目に信仰生活を志して居たかゝ解る。惜むべくは彼に未だ神の恩寵の事が充分徹底せず、自力で信仰の修養をせやうと思つたから却て苦しくなつた譯である。

其後九年十一月下旬、私が旅行して宮崎の或友人の處に居た時、「まあ御覽なさい、エライ事を造つたものですよ」と差出された新聞の記事を見ると、其頃あつた強盜殺人の記事である。私は讀んで見て喫驚した。「是は私が永い間探して居た私の友達ですよ」といつた私の言に友人も喫驚して「君は人殺の友人をもつて居るのかね」といふやうな譯で、私は早速準備をして別府に歸つた。すると刑事が二人も来て色々な事を聞いて行つた。二週間留守中諸方から来て居る手紙の中に、神戸の橋分監からの手紙で、

『先生眞に申譯がありません、私は不日絞首臺上の露と消なければなりません、モ一度御目に懸つて教の事を聞きたい』と書いてある。其後又別府と大分の刑事が訪ねて来て本人は今大分に來て居る。非常に落付いて居て人を殺した者のやうではない

といふ事であつた。私は早速大分の監獄を訪問する事にした。其時の私の心持を露骨にいへば、折角あれ迄世話をして遣つたのに、人殺のやうな大罪を犯すとは誠に怪しからぬ、一ツ遇つて大に責めて遣らねばならぬといふ考があつた。監獄に行つて先づ典獄に遇ふと、典獄は本人が大變貴方を慕つて居るといはれた。頓て私は案内せられて本人の處に行つた。

鬚や髪を蓬々と伸して汚い羽織を着た山口は、左右より十人程の看守に番せられて出て来た。私を見るや否「先生誠に申譯ない事を致しました」といふて、涙をボロ／＼流したのである。私は此有様を見て、其處に行く途中の考は何處へやら去つて終ひ、唯もう彼に對する同情の念に動かされた。然し先づ「今更申譯ない事をしたと言つたとして仕方がないぢやないか」としかいへなかつた。すると彼は

「神様に對して何とも誠に申譯がありません。今でも救はれませふか」

といふたのである。私はもう堪らなくなつた。「イヤ、僕が悪かつた。モット徹底する迄君を導いて置けばこんな事にはならなかつたであらふに、イヤ僕が悪かつたよ。聖

書には又人を憎む者は人を殺す者であるとあるが、此光に照らされては僕も君と同じ罪人だ。マア一緒に祈らふ」と、二人で祈禱を献げた。私は面を擧げて彼を見るに忍びず、ソコ／＼にして其場を出やうとすると、「先生一寸待つて下さい、どうぞ聖書を差入れて下さいませんか」「イヤ、聖書なら先刻受付に差入れて置いたから」といふて此第一回獄中訪問はソコ／＼にして歸つた。歸宅して私は神の前に省みて大に探られた。何故モット彼に徹底する迄傳道して置かなかつたらふと、今更残念がつても仕方がない事を思ふて自ら責められ深く悲しんだ事である。

其後數日してから私の處へ手紙を寄越した。其手紙には聖書を神の言と信じられないの牧師傳道者がどうであるの、自分よりも大罪を犯して居る者でも捕へられぬではないか等いろ／＼懷疑の手紙が来た。私は眞に悔改めた事と思つて居たのに、まだ眞に信仰したのではなかつた。其後にも彼は聖書を引いて、聖書には聖靈を汚す者は此世に於ても來世に於ても赦されないとか、又一度恵を受けてから墮落した者は神の子を再び十字架に釘た者で、最早悔改に立返らす事が出来ぬとあるから、私はどうしても

■最早神様に救はれる事は出来ない。といふ失望した手紙を寄越した事があるが、其時には私は彼に遇つていろ／＼話した。君は先に潔められて居たのか、潔の恵さへまだ受けて居なかつたのだ、聖霊を汚すとは例へば幸徳秋水のやうな人の事で、幸徳は以前基督信者であつたとかいふが、あんな基督抹殺論など書くやうになつた。然るに君はいかにも大罪を犯したには相違ないが自分から自白したのではないか。君は一体何故自白したのか尙又神戸から又大分から僕の處へ手紙を寄越したのは一体何の爲か。君にはまた救はれたいといふ願があるではないか。是れは神の導である。まだ神が君をお捨てなさらぬからである。神様が見捨てなされば救はれないなどいふ願も起らないやうになるのだ。一体君は聖書の教を守りて實行せねばならぬと思ふたのが抑も間違で、聖書は信仰によりて救はれてこそ守れるやうになるのであるといろいろと話して共に祈つた。

其後彼の生涯は全く變つた。そして豫審の時にでも以前には七八人の看守がついて居て話したものであるが、後には一人の看守だけついて居て、私と思ふ存分信仰上の談話をする事が出来るやうになり、寛大なる取扱を受けるやうになつた。これも彼が變化して改悛の情を表はした爲である。救はれた後の彼の心の變化は懺悔録や殊に彼の手紙に詳細に表はれて居るから、其は省く。

■愈々公判の時が来た。私は傍聴に行つたが、型の如く訊問のあつた中に、被告の宗教は何かといふ問に對して、彼は「今は基督信者であります」と明瞭に答へた。私は是を聞いて痛快に感じた。彼は過去に於て如何なる大罪を犯せるにせよ、今は立派な基督信者である。身は法廷に立ち、國法の制裁を受けねばならぬ者であるが、靈は天國に行く資格を與へられた、彼は今は基督信者である。私は心の中に感謝を禁じ得なかつた。やがて判事は彼の罪狀を陳述して後、被告が金庫を以て逃げんとする時に捕へられたから、人を殺したのは、其血路を開く爲ではなかつたかといふ意味の言を言はれたが、彼はイヤ私はやつてやれといふ考でやりましたと明白に答へた。逃る爲であつたらふと言れた時、「裁判長閣下、今日は私は神様の前に良心を偽る事は出来ませぬ。貴方にも良心は御有りでありませぬ、私は良心に對して告白するのであります。

他の一人の時も、其人が柔道を知つて居るから是はたまらぬと思つてやりました」と彼は神の前に正直に告白した。検事は、「大澤牧師に送つた手紙等によりても改悛の情は明かであるが、法は曲げる事は出来ない。被告は肉に死んで靈に生きん事を欲するのだ」といつたやうな意味で、同情ある論告をされ、辯護士もかの山田憲の如き兇悪無類の大悪人でも、愈々死刑に處せられると世人は同情した。況して被告は改悛の情歴然たる者があるからといふ意味で辯護せられたが、彼は遂に死刑の宣告を受けた。死刑の宣告を受けた者は大概控訴するので、大分監獄の如きも其地に控訴院がない爲に死刑執行場がないといふ事である。然るに彼は控訴せない。其後彼は私に「御蔭で死刑の宣告を受けました。殺した人の遺族に對しても控訴は出来ません。潔く服罪します」といふ事であつたから、私は「君は感心だ」と賞めた事である。其頃彼は私に着物を賣つてくれと頼んだ。監獄では控訴期間満了まで未だ五日間あるから、其間に心替がしてはならぬからと注意したけれども、彼は控訴せぬと決心して居る事故、其衣物を賣つてくれるやうに頼んだ。私は其を古衣屋へ持つて行つて一

圓五十錢を得た。彼は其に加へて所持金八圓を出し、借金して居る人を一々私に言つて、其を以て拂つてくれるやうに頼んだ。其中には山から私の處に歸つて来る時に借りた五十錢もある。そして殘金の中一圓五十錢を東京のリバイバル大會に、他に一圓五十錢を下關教會に寄附するやうに申出でた。

其後遇つた時には、「此頃私は中々忙しう御座います。證明も書いてありますし、聖潔の友の求禱にある問題の爲にも一々祈つてゐます」といふ事であつた。彼は又裁判長や監獄局長に陳述書を書いて出した。

彼の臨終

死刑執行の時には私に立會を許可してくれるやうに、かねてから本人が典獄に願つて居たので、去る六月十九日私の許に大分監獄から電報が来た。私は早速大分に行つて、長崎監獄で愈々死刑が執行せらるゝ事を聞き、彼は是より先き長崎に押送せられてゐた。直様長崎に急行した。同地片淵分監より六月廿一日午前十時に執行するから

八時迄に来てくれといふ通知を受けて、同日其時刻迄に同分監を訪問した。私が典獄と話して居る中、看守が来て「山口がブツ〜言つて困ります」といつて来た事を聞けば、彼は私が訪ねて来た事を聞きて愈々今日死刑を執行せらるゝ事を悟つた様子で看守に向つて何故モット早く知らせてくれなかつたか、此儘では大澤先生に面會は出来ぬ、髪も刈らねばならぬし、鬚も剃らねばならぬ、自分の室も片付けねばならず、便所にも行つて置かねばならぬとてブツ〜言つたといふのである。此使所に行つて置かねばならぬといふのは、死刑執行を豫感して其時不調法のないやうにといふ考からである。鬚を剃る事は剃刀を使用する事故監獄では鬚を剃る事は非常に心配した様であるが、結局相談の上で、私の前で剃る事になつた。私は彼に遇ふや、「ヤー暫らく」と云て握手をしたが彼は非常に喜び、「ニコ〜せる顔で平常と何等變つた様子もなく、「汽車で隣の驛迄行くのでも何か支度が入るのである」

先生今日は天國へ行くんですから、こんな頭や髭ではねー」と、一同を笑はせ乍ら、私の前で髪を刈つた。髪が済むと、手錠を締められて髭を剃つて貰つた。そして

抱へて来た風呂敷包の中からタオルを出して顔を洗つた。此タオルは一ヶ月前に差入れたもので、彼が今日の爲にいかに用意周到に仕度をして居たかど解る。

それより私共は別室の面會所に於て、教誨師や多くの監守其他の立會の前にて、約一時間共に語つたり祈つたりした。何か言遺す事はないかといへば「何もありません」と答へ、聖書は何處を一番愛讀したかと聞けば「希伯來書はよいですな」といふ、心靈的に實に深い希伯來書のやうな處を愛讀して居た處を見ても、彼れがいかに心靈的に進んで居たかど解る。「殊に『憚らずして恩惠の座に来るべし』なごいふ言では實に恵まれます」と附加へた。其次は何を愛讀するかといへば「羅馬書です、羅馬書もよう御座いますね」といふ。其處で何處か好きな處を讀むやうに求めると、彼は羅馬書七、八章を讀んだ。次に私は約翰傳十四章一―三節「なんぢら心に憂ふる勿れ、神を信じ我を信すべし云々」及び路加傳十六章廿二節上半「貧者死たれば天使等によりてアブラハムの懷に送られたり」又星野兄の送られた路加傳廿三章四十三節「イエス曰けるは誠に我なんぢに告ん、今日なんぢ我と共に樂園にあるべし」を讀み、主の

再臨の時再び會ふ事を約して祈禱に移つた。

彼は先づ最後の祈禱を献げた。「神様、私のやうな世の中より全く捨てられた、全身節々骨髓細胞に至る迄罪を以て満されたこんな大罪人をも、あなたの愛を以て溶かして」と、彼は大なる感激の中に、大罪を犯せる罪人を救ひ給ふた神の愛と、十字架の血潮は斯る大罪人をも潔め給ふた事を感謝し「何と感謝してよいか解りません」といひ、次に「此私のやうな者を今に至る迄導いて下さつた大澤牧師に御祝福を豊かに下し、愈々聖靈に満して主の御用の爲に用ゐる給へ」と私の爲にも熱誠重ねて祈つてくれた。

私は今迄多の人に祈つて貰つた事がある。按手禮を受ける時には監督に手を按いて祈つて貰つたが、未だ曾て此時程大なる感銘を受けた事はない。今二三十分して死なねばならぬ者が、自分の事を忘れて、熱誠重ねて私の爲に祈つてくれたのである。此場合彼の過去が何であるか、今の環境が何であるかは問題ではない。身には獄衣を着けて居ても、一聖者として心を天に注いで祈禱を献ぐる其神々しさ。私は唯彼の熱誠に

吸込まれてアメンと和するのであつた。次いで彼は大分監獄や長崎監獄の人々の爲に祈り「私は此等の人々の親切に對して何をも報ゆる事が出来ませんが、何卒豊なる祝福を下し給へ」と祈り、次に殺害せし人の遺族の爲に、懺悔と謙遜を以て神が何等かの方法を以て慰め給はん事を祈つた。其より私の同業者兼牧師青木牧師等の爲め、又私の教會員で唯一度だけ彼を訪問した事のある林老人の爲にも祈つた。かくて彼の祈禱終るや、私は彼の頭に手を按いて祈つた處、彼は涙を流して感謝に溢れた。祈り終つてから互に是で用事が済んだといつて手を握り合つて喜んだ。

かくて彼はかねてから用意して居た者と見れば、件の風呂敷包の中より取出した白い禪と白い衣を着け、白い三尺を締め、(是は二ヶ月程前に差入れたものである)、其上に青い獄衣を着け、「先生いろく御世話になりました。私は

先に行つて待つて居ますよ。再臨の時に遇ひませふ」と言ひ乍ら、雨のシヨボシヨボ降る中を、多數の看守に擁せられて刑場へへ行つた。私も典獄検査事教誨師其他の者と共に立會つた。典獄は其處で司法大臣よりの命令書を讀上げ、本日死刑執行の

旨を申渡された。後に聞いた話であるが、此言渡しを受けると、十人の中九人迄は倒れるといふ事である。倒れない一人も、刑臺に上る五寸位の高さの段に足を擧げかねるので、牛でも屠殺場に曳くやうに、曳摺るやうにして刑臺に連れて行くといふ事であるが、彼はそういふ事はなかつた。言渡しを受けた後、何かいふ事はないかと問はれると、紙と筆を求めた。彼の足はかすかに慄ふて居た。私は之を見て彼の爲に祈つて居た。やがて彼は筆を持つて暫く瞑目して居る。黙禱を捧げて居るのである。黙禱を終へて目を開き、左記の辭世の歌を半紙一枚に書いて私に渡した。(巻頭の文字です)

(十字架を書いて其下に) 刑臺上の感謝

血に頼れる罪人

山口 裕謹白

罪の身は浮世の塵となるとても

心は清き 神の京城へ

かくて列席者一同に謝辭を述べ、私に向つては

「また遇ひます、左様なら」

と告別をつげた。私は念の爲め「君は幾つだったかね」ときくと「四十二になります」と答へた。かくて彼は獄衣を脱ぎすて、白衣のみとなつた。手錠を解められ、目隠をせられると、

「私はクリスチャンです、目隠などは取つて下さい」

といつたが、教誨師は之は規則だからと諭し、私も

「此世に居る中は律法に従ふべきだ、今瞬間で天國だ、そんな小さな事に文句言はずに」

と申したところ

「さうです、左様なら」

と申し、何等慮する様子もなく、刑臺に曳かれて行つた。臺上にて首に綱を掛けられると

■「山口裕は今天國に 行きますハレルヤ、ハレルヤ…」

と、ハレルヤを二唱し終らぬ中に、踏板は外され、彼の身体は地下室に落ちて絞殺される

た。時に午前十時十一分。森殿の氣は場に漲り、其場に居た二十人程の者は皆呼吸を凝して黙し、一同地下室の山口の頭に目を注いで居る。獄醫が二人地下室に下りて脈を見て居たが、十五分間にして息絶れた事を報告した。

××××× ××××× ×××××

▲彼の所持せし聖書の見返しに記しありたる言

○「一粒の麥もし地に落て死すば惟一にて存らん、死なば多の實を結ぶべし」

(約十二〇廿四)

大正十年六月八日朝の祈禱に於ての靈感 惠の下にある辭。

又リバイバル唱歌の見返しには左の歌數首が記してあつた。

○大正十年六月五日午前七時五分發車前の十分間

身は軽く心は潔く洗はれつ

衣換して今日の首途

○車窓懺悔

ほゝゑみつ小徑に咲ける白百合に

うら耻しき我心かな

○崎陽港(長崎の事)着車述懐

西の海波半かに眞帆あげて

惠の船に乗るぞ安けれ

○大正十年六月十二日(第二安息日)恩寵を感謝して

(太十四〇卅二) 嗚呼感謝

極樂は常世の外と想ひしに

獄も神の聖國なりけり

(リバイバル唱歌八十九、神を信する身には何處も天國の事を實感す)

彼の手紙

以下彼が獄中より大澤牧師に送れる通信文である。是等は彼の自叙傳の後を受けて、彼が獄中に於ていかに其信仰が發育したか其経路を示すものである。

◎例の持病又々勃發

(大分監獄より差出せし面會依頼狀、大正九年十一月末) 先達の手紙は届きましたか。言語同斷の始末、教會の面目を汚し實に恐入ります。罪の爲に捨鉢となつて居た罪奴も、幸にして篤厚なる先生の御導きによりて神ある事を知り、悔改めの日送りを致して居りましたが、例の持病(矛盾極まる現代社會に對する反感)亦々勃發、薄信の力を以て抑ゆ可くも無之、暴狀至らざる處なく今度の醜体を來し、今更申譯ありませんが、已に十日の菊、致方もありません。只此上は凡ての責任を我に歸し一死以て謝罪するの期を待つ計りであります。

就而私も彼の石井藤吉の如くに清らかな身を以て逝き度いのであります。眞にすみ

ませんが、ごうか神様の爲に最後の救を垂れては下さりませんか。是非今一度恩師の慈顔に接して、心残りなく行く可き處へ行き度いのです。近い内に何卒面會に來て下さいませんか、夫のみ伏而願います。以下畧

◎斷然教會を出たる理由

(同年十二月五日附) 拜呈仕候先日は御多忙中態々御越被下只小生は溢るゝ喜を慚愧の念もて録々御話も出來ず遺憾の至りに被存候。今に始めぬ先生の御熱誠、小生の如き罪奴も慥かに或物を得たるを悦び居候。

然し小生が斷然教會を出でたる理由に付ては、今後の爲御參考迄に左に申述仕置候。

- 一、貴教會の唯一教條とせる聖書其儘の實行を疑ふ事。
- 一、教役者其人さへも實行出來ざる事、然らば自家撞着の空想にあらずや。
- 一、現代の社會は黄金萬能なり。金の前に叩頭拜謝しあらゆる罪惡を行ふ(宗教家を先として)精神的に之を行ふ者は世の勝利者と崇められ、現實的のものは敗者として罰せられ、其間神の前に(神あらば)何等の差等なし。
- 一、吾人は心の自由を尊び。外物の支障を受くる者にあらず。世に絶對の善あるに

非ず。絶對の惡あるにあらず。所謂神なるものも其幻影にあらずや。小生の今日ある宜敷御察し被下度候。

一、今日の倫理道德なるものは自啓的のものにあらずして、唯表面を装へる自己の地位境遇上より打算せる産物なり。

識者の眼より大馬鹿者？狂病者？の言葉と一笑に葬らるゝやも計られ不申候へ共、之は小生の赤裸の見解に有之候。而し小生は今は自己の責任を自覺し只真理の前に服罪するのみに御座候。何卒小生の愚を捨て給はず御垂教被下度、小生は夫にて永遠の安心を得れば大満足に候。……斯る罪奴が旬日にも神を認めつゝ潔き生活の裡に在りし昔日の賜物を謹而拜謝仕候。已に軌道を逸した言語同斷の始末、教會の体面を汚し御鴻恩も仇にて報ずるの悲むべき場合に相成り、實に申譯も無之眞に謝罪仕候。
(聖書差入の感謝及び其他の書籍差入の希望附記あり)

◎不平や慾の雲から拭はれて

(十二月二十四日附) 御懇書謹而拜見致しました。世間から惡魔の様に見做されて居る罪奴に對し何と云ふ御優しい御言葉でせうか。冷やかなる周圍の裡にある身には

温情ある天使に接する思です。(嗚呼此端書一枚！先生の熱誠溢るゝ此端書を通して私は實に憧憬しつゝある神の面影に接し得るのです)。今は浮きたる世の外に立ちて、回顧寂寞たる獄屋住ひの今日此頃、私の昧き心は何時しか不平や慾の雲から拭はれて水晶の如く成て行くの感がします。神の膝下に新人の衣を着けて眞に懺悔の祈を捧げ、永劫の平安を得る日も近き内にある事と神に謝して居ります。アーメン。

◎日にくゝ惡魔の呪咀より覺めて

(十二月十七日附) 拜呈先達書殘し候まゝ一寸申添候。御言葉に甘へ甚だ恐入候へ共御通知之通り追々寒さに相向ひ、特に裁判も長びき目下の裕の儘にて困難致居候間、何卒御憐察の上有合せ物にてよろしく候まゝ綿入一枚並にシャツ一枚御惠送被下間敷や右伏而御願申上候。毎度御申越之御厚意肺腑に徹し忘れ難く、日にくゝ惡魔の呪咀より覺めて神に衷心より熱禱を捧げ居り候。下略

◎大愛者の恩恵に動かされつゝ

(十二月廿六日附) 一しづく膝に落ちたるわが涙

神の誠の胸に徹りて

年末御繁多中度々御訪問被下變りなき御芳情伏而奉感謝候。

特に其節諄々御教誨の御眞旨一々肺腑に徹底、斯る罪奴も溢るゝが如き大愛者の恩寵に動かされつゝ、孤燈影淡き鐵窓の裡、慚愧の念遣る瀬なく密かに落つる熱涙を振つて只々神に熱禱を捧ぐる計りに御座候。御差入の聖書目下反復熟讀、御心込められし此書籍こそ眞に我敬慕する先生の面影と心得日夕座右を離し不申、此夜はロマ書第十二章の一、二を拜誦し不思議に導かれ申し候。

『然ば兄弟よ我神の諸の慈悲をもて爾曹に勸む其身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして神に献げよ是當然の祭なり。又此世に效ふ勿れ爾曹神の全くかつ善にして悦ぶべき旨を知らんが爲に心を化て新にせよ』(羅馬書十二〇一、二)

例の直情經行の病的罪奴、一は境遇のなせるものと申し乍ら不平怨恨の感情に驅られ或一派の偏論にかぶれつゝ神の御手に社會の缺陷を満すの至誠なく、薄信盲動肉慾を送ふし野獸的慘害を敢てせしは實に痛恨の至りに候

今や我思想界混亂の時代にして、民は其去就に迷ひ人を傷ひ國を過たんとす。此刹那々に沈みつゝある罪の世を救ふべく聖戰一貫御奮勵の程神の爲に奉祈候。實に碎れ物相應の御用相果すべくの處、反つて此大失態をなしたる罪奴に對し依然たる御寛大の思召、特に物質上の御配慮迄煩はし恐惶千萬實に穴へも入り度考に御座候。編入

シャツ、併に書籍一冊早速御差入被下唯涙を以て拜謝するの外無之候。目下のロビンソンの境遇同一にて書籍は向上の唯一の伴侶に御座候。官の文明的御處遇に由りて身は安全に過し居り候間乍憚御安心被下度、唯火の氣なしに寒いのに閉口致候。御差入の品にて之より大に助かり申候。伏而教會の發展を祈り且御全家御一同御機嫌よく御越年之程祈り上げ候。下略

◎一朝夢醒めて慚汗背をうるほす次第

(大正十年一月八日附) 謹而新正奉賀候、特に過去の一年を回想して短日月なりとは云へ平安なる御家庭に於て光榮ある靈的生活を與へられたる事を深く奉謝候。今や此別天地に在りて日日聖書を拜誦し斯る罪奴も言ひ知れぬ靈覺を與へられ、陰黒き谷にも一閃の曙光を拜しつゝ次第に罪惡の幻影より遠かり居候。熱血滴る十字架は靈驗實に不可思議なる神秘に有之候。

新らしき年と共に再び新らしき晴着を與へられたる事を感謝致居候。先生の御教導の甚大なる御恩顧今更思ひ出て、忘れざる次第に候。薄信の罪奴、例の批判的眼窩にて已を誤り人を傷ひ今日の仕儀、一朝夢醒めて慚汗背を沾ほす次第に候。就而小生

は一端神を無視し十字架を無視したる大罪人なるが眞に悔改すれば再び救済の恩恵を與へらるゝ物なるや否や之小生の一大疑問なりしも。(馬可三〇廿九)「汝憂ふる勿れ唯神を信じ我を信すべし」との優渥なる大命に接し少しく落付き申候。貴意如何にや御垂教被下度候。又實際と適應せぬ所は反つて神に對し不敬と存候御一考被下度候。今や教會は只のバプテスマ計りにて事足れりとし、宗教家は宗教屋とならんとす痛嘆の至りに候。神よ希くは罪の荒野に彷徨せる弱き者を救へかし。

此度の事件にて小生は再び恐る可き暗黒の巷に出入して眞に神の權威の動かすべからざる事を痛切に感じ申候。周到なる官憲の御蔭にて最早豫審も結了可致刹那々に迫り來る已が運命に對して今は神の御前に社會的自已の責任を明らかにし、其榮の爲に動かん事を嚴肅なる決心を以て祈り居候。乍憚御安心被下度候。小生の爲に御傳道に少なからざる御障害を來し申譯も無之候。然し最後の勝利は全能者の御手に在り小生は茲に不斷の光明を認めて我教會の前途を祝福致候。 下略

◎神の子を再び十字架に釘た大罪人ですが

(二月十七日附) 拜呈早速聖潔の友併に鐵窓の二十七年御送り被下難有奉謝仕候。

小生は實に靈的愚者にて神の御子を再び十字架に釘けた大罪人ですが救はれる事が出來候か

『墮落する者は神の子を再び十字架に釘けて顯辱とするが故に復これを悔改に立返らすこと能はざるなり』 (希伯來六〇六)

何卒よろしきに御導きを奉希候。目下光を辿りつゝ日々恵まれて居りますから乍憚御安心被下度候。愚問に對して御垂教一々氷解特に恐入候。豫審が決定すれば懺悔的の感想を認める積で準備中に候。 下略

◎日々聖書を拜讀

(二月廿六日附) 拜啓一昨日御多忙の處特に御訪問被下種々御懇示の趣、一々拜承御蔭にて良く氷解日々聖書を拜讀實に渴者に於ける水に御座候。この砂漠中にありても限りなき御恵に溢れ居り候まゝ乍憚御安心被下度候。 下略

◎如何なる強情傲慢も碎けて

(二月廿日附) 拜陳毎度御多忙中にも拘らず御親切に御面會被下其都度しみぐと

御教示を給はり豊かなる靈の糧に充され、何時も御高姿を拜する毎に御懐しさの餘り無限の感に打たれ御話もそこ〜に相成り萬事失禮勝ちなる胸中御推恕被下度候。其節承り候へば天草開戦の爲御出馬御用に當らる、由嚴寒の折柄御苦勞の御事に御座候小生も主の御戦の勝利あれかしとしきりに祈居候。定めし熱き燦の舌により天火は充分に燃わ揚りたるを信じ候。形勢如何にや御報被下度候。

さて先日聖潔の友併に基督教新聞御差入たしかに拜受仕候伏而御禮申上候。聖潔の友小生にとりてはこよなき慰藉者に御座候。就中星冷かなる鐵窓より我薄命なる兄弟が信仰を披瀝したる獄中よりの音づれの一篇心から共鳴致處に候。我等が罪の爲に苦しみ給ひし主の十字架上に於ける無限の愛を眞に感じ候ては、如何なる強情傲慢も碎けて何も彼も御前にさらけ出して跪くのみ候。小生の犯罪に付ては去る十五日豫審終結凡てに於て證據充分なりとて刑法第二百三十八條及同第二百四十條後段に該當せる重き強盜致死の刑に従つて決定を與へられ不日公判開廷の筈に候。

斯る悽慘なる大罪人が滞りなく今日に及び窮窟なる獄舎生活に於て一杯の白湯一椀の麥飯も深き感謝を表して之を受け法悦の日暮しを爲しつゝあるは是何の爲か。嗚呼主の愛は深く主の御徳は高い哉。苦き杯甘き杯、唯御手の儘に清き滴として受けんの

みに御座候アーメン。之も全く信仰深き諸兄弟の御加禱の然らしむる處と厚く感佩候。先は右御禮旁々近況御知らせ如斯御座候。頓首

◎何卒キツパリとした御垂教を

(二月廿二日附) 今日御惠の聖潔の友を拜見しましたから救の三段と云ふ處に、更生(水のバプテスマ)聖潔(火のバプテスマ)榮化と云ふ事を示してありましたが能く解りません。此事は私は兼て知り度いと思ふて居たのです。それと聖書には信仰を義とする説と行に由りて信仰を全備する説と二通りありますが、之は如何にして調和されませうか。聖書其儘に用ふる事は人につまづきを與ふる事になりませぬか。私等薄信の者には其邊の處が未だハッキリ致ませんが師よ何卒キツパリとした御垂教を願います。

先便に申上げた通り私の様な渴した者が活ける水の一滴に恵まれて居る事は、全く主を通した敬慕する先生の御導きの御蔭に因ること、深く〜感謝して寸時も忘れて居りません。下略

◎厳しい獄舎も何時しか天國と

(三月六日附) ……彼此と教務御多忙中に瘦の様な私を顧み給ひ度々貴重な時間を割いて御出になつて尊い御教に近づく様にして下さる眞實の御愛賜に對しては、私は何と申上げて宜いやら感謝する言葉を持たないのです。先生の御蔭によりて頑冥不靈私の如き者もほんとうに神様の愛を知る事が出来て、時々起る悪念も十字架の爲に何時しか雲の如く消れ去つて仕舞ます。今日の日曜に於て私は只今聖書を拜誦して「我等この寶を瓦器に藏てり之大に優れたる能は我より出づるにあらず神の能なる事の顯れん爲なり」と云ふ事を深く々々味はせて頂きました。若しも只今私の膝から聖書を引放したならば命知らずの大馬鹿者の私は又どんな大間違をして居るかも知れません。一念十字架の御前にひれ伏せば法鎖鐵鎖の厳しい獄舎も何時しか天國と變るのであります。而して私はリバイバル唱歌を黙唱して感謝して居ります。眞に神様の求め給ふ祭物は碎けたる靈魂よりない事を信じます時に神様は喜んで下さいます。私共が神様に捧げる物は徳行とか事業とか云ふものではありません。只瀧ぎ盡せぬ罪障の涙です。悔悟です、懺悔です。之は決して私が斯る窮境に立ちて所謂苦しい時の神頼みではあ

りません。如何に堂々たる人でも人間は草です、エホバの息が一度かゝると一切の野心、大望、自負、傲慢、我執の塵埃はさらりと押流されて了ふのです。而して最後の斷案の下さるる事は事實であつて誰しも必ず此一大事に相遇しなければならぬ約束があるのです。然し平常は已れがくくの迷執に捉はれて人の事と思ふて居ります。嗚呼神様は克くもく私の様な罪奴にも、早くく爾の目を覺せよと其愛の御聲を以て呼んで下さるのです。如何な驕慢な私の膝も自ら屈するのです。私は決して自分の罪を誤魔化してなるだけ軽くして下さいと祈りません。唯自分の罪の滅び行く事を恐惶を以て祈つて居ります。こんな事を申上げると自分の味噌を申上げる様になつて來ます。が深い御導を受けた先生迄に只私の目下の感想を披瀝するのです。

嗚呼鐵門深き此密室にも神光豊かなり。青天を頂き大道を濶歩する幸なる愛兄弟よ、希くは轍跡の線事とせらるゝなく之が神様の尊い御榮として幾分にも皆様の御心琴にふるゝ事があらば私は感謝に堪わないのであります。 中略

昨日御役所から通知がありました。が金員並に聖潔の友又々御差入被下私は何と御禮申上て良いか實に感謝に充ち充ちて居ります。聖潔の友や基督教新聞は此上なき慰めと導きを與へて呉れます。然し金員は恐惶の至りです。御蔭で私は何事も恵に充ちて居りますからどうか御懸念なく教會の方の大切な御用に充て、下さいませ

御氣の毒に堪へませんから。

御役所の方でも先生が時々御出になつて私に教誨を加へて下さるのを喜んで居る様です。而して私は目下大變御上の厚い御世話の下に在りますから別段障りなく日々聖書に親しんで居る事が出来ます。下略

◎十字架を仰ぎ候へば

(三月十六日附) 敬啓餘寒厳しく候處御變りも無之候哉奉伺候。降而小弟豊なる主の恩の下に日々聖書のページを繰返へし居り候、何様さぐり讀みにて希伯來書などは少しく解し兼ねる處も有之候。然し尙熟讀(信仰眼を以て)徹底致度ものと考へ居り候。時々愚痴も起り候へども十字架を仰ぎ候へば何時となく打消されめぐみにとかされひれ伏すのみに候。毎度聖潔の友、基督教新聞御送附難有御禮申上候唯一の慰めに御座候。中略公判も近々の内ならんと豫想仕候他へ御出張の折は御知らせ被下度候。

◎人知れずハレルヤを連發

(三月廿八日附) 御懇書に接し欣しくしみくと拜見仕候就中御説教の筋書は私の聖書研究に多大の導きを與へられ御芳志の段深く奉感謝候。先達御差入の聖潔と力、

聖潔のバプテスマ直ちに眼を通し候處恰も手術臺に横たへ名醫の大手術を受くるの感を催し私の病患も大に清快を覺へ人知れずハレルヤを連發仕候。近來になき大歡喜法悦の狀御察し被下度候。昨日の安息日より唯々讚美と感謝の祈りを以て日を暮し申候。此贈物を獨占するは餘り勿体なく早速筆を執て乍略儀茲に溢るゝ惠の萬分の一を御漏しする次第に候。アーメン

◎日に三度宛祈つて居ります

(三月廿四日附) 謹で申上ます。毎度御多用中の處遠路態々御越被下て懐しい温容に接するの光榮を與へ給ふのみならず、其都度絶大なる主の御能に充たされまして少弱な私も云ひ知れぬ御恩寵に浴する事を誠に感謝致します。特に『爾曹の名の天に録されしを喜とすべし』てふ確固不拔の眞理はしかと罪奴の心琴を緊張せしめました。御高示の通り本週間は基督教徒にとりて大切な聖日ですから私も最も謹慎の誠意をささげ、分て福音書を拜誦することに致しました。私の様な眞黒な罪奴は其主人の膳より落つるパンの屑を喰ふ事が出来たならば此上の幸はありません。嗚呼此パンの屑! 私共に今なくてはならぬ物は唯此一つです。希くば我敬愛する先生! 眞黒な罪惡の爲に

今や病態の危機に瀕せる此罪奴を憫み給ひパンな屑を私に投じて早く〜靈の生涯に入らしめて下さい。主祈主禱特に此際皆様の御加禱を乞ふ。 中略

至恐大なる見違ひから社會に害毒を流し人から蛇蝎視されて暗黒裡に彷徨する罪奴に對し、至誠の熱腸を以て神の愛を傾けられ永久の光を與へられたる御鴻恩に對して、私は何をして報ずる事が出来様かと日夜心を碎いて居りますが、今は及びません。先生どうぞ許して下さい。私は爾曹罪を悔ひ心を改めて其罪を抹さるゝ事を爲よと云ふ事しか持つ事が出来ないのです。

共進會の機會を利用して特別傳道の御計畫の由、實に御苦勞の至り恐縮に堪へません。浮世の人が騒亂の巷で改造とか解放とか云ふて怒鳴つたり又幻影の様な快樂と僥倖に狂ふて居る中に、日々の生活費を節減して粗食粗衣の簡易生活に甘んじ、大切な心身を尊い救靈の使命に捧げ日々蔭で迷へる同胞が早く救はれる様にと祈つて居らるゝあの美しい兄弟の心を、世人が少しでも知つて呉れると良いと思ひますが、數ならぬ乍ら私も此幽室で密に今度の特別傳道の爲に日に三度づゝ祈つて居ります。神様は必ずあなた方の熱誠を聞きしめし不斷の御守護を垂れさせらるゝ事を確信して居ります。 中略

御差入の紙筆書籍三冊たしかに拜受致しました。御言葉に甘んじ斯る身の上にて御多端の中に御迷惑計りかけて實に恐縮に堪へません。伏而御禮を繰返し〜申述べます。特に私は今考へると奥様を欺いて飛出して仕舞つたのです。已に十日の菊ながら申譯ありません、何卒よろしく。

◎何事も主の御手に御任せ致し

(四月二日附) 拜呈尊き御宣傳の爲に日々御善戰の御事と奉恐悦候。さて聖潔の友毎度御送附被下御蔭にて大に恵に充され感謝無量厚く御禮申上候。段々御配慮煩はし候事件も愈々進捗致小生公判日は來る四月十一日と指定相成り候旨辯証士池田吾十氏より通知有之、何事も主の御手に御任せ致候まゝ乍憚御休心被下度候。先は取敢はず述謝旁々如斯御座候。敬具

◎死刑の宣告を受け控訴せざる事を誓ひ

(四月廿三日附) 拜呈仕候昨日は雨中特に教務御多忙の砌、態々御越被下御芳旨の程實に難有御禮申上候。

さて小弟心得違の爲非常なる御煩慮相掛け候今回の事件漸く本日落着、死刑の宣告を受け、小弟は此至當なる御判決に對し慎んで服罪致し決して控訴せざる事を誓ひ、

法官の面前にて一言の懺悔をなし置き候。今や人世の最大悲惨たる此斷案の下に以前の小弟なりせば忽ち轉倒狂妄いたせるならんと存候。嗚呼之にて累年の汚罪全く滌がれて見捨てられたる靈魂は再び豊かなる御光に甦生し、聖潔き御惠を感謝して立派に神の面前に立ち得たる事を欣び申候。

此意味はとて同信の尊師又は諸兄姉でなくては御解りにならざる處に候。神の榮ある處を諸共に感謝なし被下度候。就ては是非く尊師に御上京前に今一度面會御談申上置度要件有之、特別に典獄殿の御許可を願出候間實に度々恐入候へ共成丈早く御出で被下度何時にても私は差支御座なく候。尙聖潔の友、基督教新聞今暫く御惠送被下候はゞ幸に候。 下略

◎日々イエス様の親しき御導にて

(四月廿六日) 拜呈仕候度々勝手な事計り申上御足勞を煩はし恐縮仕候。さて昨日は全く潔き新生涯の光榮ある資格を以て尊師と共に主の御前に於て祈を捧げ眞に欣喜満足大に御榮のなす處を拜したる次第に御座候。小弟は茲に慎而尊師並に教會の諸兄姉方に對し滿腔の敬意を拂ひ感謝の誠を表する者に御座候。

其節ガラクタ物御渡し致し定めて御迷惑の御事と奉恐察候。

(以下所持品の處置、兄上及知己への傳言注意を記しあり)

醜辱を晒したる上非常なる御配慮煩はし何とも申譯なき次第に候へども多罪幾重にも御容赦被下度候。之より日々イエス様の親しき御導きにて安心して足元も大に輕快相成り候。小弟は實に林老兄に對し畏敬の念を禁する能はず同兄の爲に目夕祈禱を怠り不申候。 下略

五月七日附 (所持品の處置に就ての依頼狀なり)

◎事毎に感謝満足の日を暮し

(五月十八日附) 東京よりの御端書並に基督教新聞隨に拜掌御厚情の程欣しく繰返し御禮申上候。特に御多端の際にもかかはらず愚兄宅へわざわざ御出懸被下、例の品物御渡し被下候由夫にて大に安心仕候。承り候へば其後直ちに鹿兒島地方へ傳道の爲御出張聖き御用に當られ候由、今に變らぬ御熱誠感佩の至りに堪へず私も主の御惠の豊かなる事を密に先生の爲に祈り居る次第に候。當方は其後格別變りは無之万事を全能の御手に托し平安の守りを受けて日々周到なる官上の御取扱を蒙り事毎に感謝満足の日暮を致居候。何れ主の御許しあらば拜眉の上委しく言上仕べく候、殊に封入の郵券五拾枚、之は私が献物として鐵鎖裡に於ける神聖なる勞働より絞り出したる物にて、典獄殿へ懇願格別の御思召により貴教會へ差上げ得るの光榮を與へ給ひし事なれば左様

御承知被下度候。下畧

◎死は唯入口にして

(五月廿九日附) 敬啓仕候宮崎よりの御ハガキ並に聖潔の友髓に拜掌、聖き思召の程身に泌みて嬉しく押戴き申候。私の敬慕せる尊師が御榮ある御健闘振りを拜承する毎に溢るゝばかりの讚美と感謝とを以て祈を献ぐる事に御座候。降而私事御熱禱によりて日々恵まれ申候。先達御留守宅へ再三發信致置候間御繁多乍ら順次に御覽被下度候。私は尊き平康の御手に護られ神恩溢るゝ潔き血汐は已に間一髪の處にて地獄に迄墮つべかりし罪人なる此身にも濺がれたる無窮なる此賜。實に難有しとも忝けなしとも逆も〜筆紙の盡す處には御座なく候。至愚頑迷にして罪より罪に沈み斯る深き御恩寵に背きたる昔日を思ふて恐縮に堪はず流汗自ら背を沾す次第に候。常に喜ぶべし、斷せず祈るべし、凡ての事感謝すべしとは眞に血汐の功績に生きたる法悦歡喜押へんとして押へ能はざる至誠至情に有之、昨日迄は不平煩悶の劫火に身を燃し、怨毒の呪を以て呪はれたる罪の身が『唯我を信すべし』との天聲に呼び醒されて、思ひ揚りし一念をさらりと投棄て只管に碎け心を献げて至心眞樂大能の照護に生る身と相成りし

奇しき神の聖工を拜しては、驚絶駭絶實に我ながら不可思議の感に打たれたる者に候。永生の確信を與へられたる者には死は唯入口にして其先には大なる天地が展開せられ其處にて偉大なる務を行ふものなる由は豫て傳承する處に候『我儕其眞狀を見るべければなり』誠に〜其通りなる事に心付き、今は今後まだまだ其廣い舞臺に出で、大に活動するの希望を以て目下其準備おさ〜怠りなく日々熱き祈を以て煉られたる糧を授けられ、弱き私も爲めに充ち滿され居る仕合せに有之、此境遇なればとて中々安閑として聖日を徒費する次第には無之、せめては偉大なる恩寵に對する感謝の一念に萬分の一の御奉仕をなさでは如何にも相濟まざる事なれば假令一瞬時なりとも此一事に氣付けば只安逸を貪る譯には參り不申候。

夫に就ても私如き卑賤垢だらけな手に斯る尊き天賜を取次がれたる御懇切なる尊師の御導きに對し私は多大の敬意を以て永久の祈を盡し感謝の聲を絶たざる者に御座候。且又吹けば飛ぶ如き塵芥の私に對し只一つなる天旨を享けて聖き愛の結合を給はりし林老兄に對し衷心敬慕の情を禁する不能。御身の上に神寵彌が上に豊かならん事を祈り其他の諸兄弟姉方の御加禱に對し盡きの歡を以て謹んで感謝を表する者に候。

先般池田辯護士態々面會に來られ大に喜ばれたる御言葉を承り私も密に感謝を献げたる次第に候。御上の御手厚き御取扱により大に私も仕合なる日送りを致居候之亦感謝の至りに御座候。再生の人、鐵窓廿七年及石井の自叙傳の三冊は申兼ね候へ共御差支なくば池田氏へ御寄贈被下度御願仕候。主に對して相濟まざる次第なれ

ば今後私へ金員の御差入をやめ可成尊い御用に宛てられ度く候。 下畧

◎死刑臺も今や光輝燦爛たる十字架と變り

(六月四日附) 日々祈居候處御許を蒙り久々にて豊かなる温顔を拜し色々御話も承り且最後の御熱禱を頂き誠に〳〵御蔭様にて燃やされ大に嬉しく感謝したる次第に候あの銀の匙を盗んだジャンバルジャンと皓々雪の如き僧正との對照と、聖書全部の愛を言ひ現はし感謝に活き感謝に働き給ふ彼クリスチャンたる先生と不平に悶ね罪に死せんとするの殺人鬼との對照は實に奇しき機縁感應に有之、是ぞ靈光一閃十字架上の純潔なる尊き大火焔に御座候。この光の光明によりて戰慄すべき私の死刑臺も今や光輝燦爛たる十字架と變り汚辱極まる死の冠は美しき義の冠と相成申候。何とも云へぬ奇蹟に候はずや……………

又薄暗い檻の中を見も聞もせぬ人より突然手紙が舞込み候。見れば僧廿八歳小幡某と記されあり、録な事ではあるまいと思ふてよく〳〵讀み來れば、意外、こんな殺人鬼に對する共鳴者に御座候。聖惠なるバイブルの前に懺悔を捧ぐる死刑囚と清調の讀經を樂しむ若僧との對照亦面白き尊き御旨に候はずや。私はこんな處に不思議な光を

認め申候。異教徒に迄及ぼし給ひたる主の御榮感謝爲し居る次第に候。 下略

◎移監の御通知迄

(六月六日附、長崎より) 拜啓一昨日突然の御命令により午前七時大分發の列車にて當地へ押送相成り、七時三十分御地通過の際は謹而先生に對し車中より默禱を捧げたる事に候。折尾通過の砌仲間の連中が要撃を爲すべき虞あるを以て密に注意を促され候へ共、今日の私は純然たるクリスチャンとして、萬一斯る場合に遭遇するも甘んじて其刃に斃れ、而して其人の爲に祈る決心なりしも其事なくて止み周到なる御戒護により午後五時着、無事御手に守られて當監に在りても御懇切なる御思召を蒙り益々充され居次第に付何卒御感謝被下度候。私の靈眼に於る十字架は色々光輝燦爛たるものと相成候。猶恐入申候へ共山口監獄典獄殿へ先生より私入信の動機經過等御報告被下候はゞ本懐に候。大分監獄の方へも御序の節宜敷御願申上候。御夫人初め愛兄姉方へよろしく御傳へ被下度相變らず時々御通信御導の程伏而奉願候。何から何迄實に恐惶千萬に奉存候。御寛容被下度候。先は右移監の御通知迄乍略儀如斯御座候 頓首

◎喜びつゝ、祈りつゝ、法悦の日を送り

(六月十三日附) 八日の御懇書拜見仕候。御多端の砌度々御配慮を蒙り御蔭様にて愚衷も相届き安心仕候。此許神寵豊かに厚き御上の御庇護の下に喜つゝ、祈りつゝ、法悦の日を送り居候。「極樂は常世の外と思ひしにひとやの裡も神の國なれ」(リバイバル唱歌第八十九)とは愚弟の信仰生活に於ける目のあたりのスケッチに御座候。特にかのトラクト御教示の希伯來書十一〇十三―十六を拜誦大に惠まれ感謝の至に候。

『此等は皆信仰を抱きて死ねり未だ約束のものを受ざりしが遙に之を望て喜び地に在ては自ら賓旅なり寄寓者なりと言へり。如此いふ者は家郷を尋る事を表はず也。彼等もし其出し地を念はゞ歸るべきの機ありしなるべし。されど彼等は更に愈れる處すなはち天に在るところを慕へり是故に神は其神を稱ふることを耻とせざりき蓋かれらの爲に京城を備へ給ふれば也』(希伯來書十一〇十三―十六)

温かき天父の愛に連なれる先生の御言葉を承はる毎に實に拜跪捧禱の外無之候。約翰傳十二〇廿四に付ては靈覺を與へられ候。然し未だ〳〵隔靴の歎を脱れ不申御序も有之候はゞ御垂教奉願候。御言葉に甘へ恐入候へ共河内君の恩寵の宗教若し御手元に

有之候はゞ御惠送被下度候。最後の際は可成先生の御臨場を仰ぎ度き心底にて當監の長官殿にも已に其趣願出置候多分御裁可と被存候間乍恐縮萬一御他行中にては御本宅様方へ御報次第御出向奉願候。

中田先生の著耶蘇は來るかビュリタンの事を書きしもの御手元に無之哉

(六月廿日附) 「〇〇〇〇は天の如し」杜宇一聲五更の闇をつんざきて寂しき眠より覺めた私は四顧耽々夜氣森然たる此鐵窓場裡、獨り冷かなる衾の上に端坐して心靜かに天を仰ぎ我を離れて念する時、不圖『康強なる者は醫者の助を需めず惟病ある者のみ之を需む我來るは義人を招く爲に非ず罪ある人を召て悔改めさせんが爲なり』との聖書の御言葉が私の耳に這入りました。此御言葉を此時イエス様からあり〳〵と私は聞く事が出来ました。嗚呼何と云ふ尊い何と云ふ愛のこもつた聖聲でしやようか！此時此御言葉が私の身の急所を衝いたのであります。私は是迄何時も失策する度毎に悔改め悔改めと云つて居りましたが、之は全く心の底からの悔改でなく、只ほんの口先計りの悔改めでありましたから、眞實に神様の聖書を知る事が出來ず、反りて神様から離れて何時も何時も此心腸には不潔な分子が潜んで居りましたから、一朝躓きますと

其汚い物が頭を擡げて益々劇しい悪事を犯し實に醜い有様に墮ちたのであります。嗚呼私は腹の底は申すに及ばず四肢五体の細胞に至る迄極端なる罪惡を以て充されて居りました者で、此十字架『只イエスキリストの贖によりて神の恩を受け功なくして義とせらるゝ也』此十字架こそまさしく極惡深重な私に向つて眞に唯一の救濟であつたと云ふ事を犇々と身に引當て、頂きました時に「爾につける總ての物を只今悉く我に明渡せ」と云ふ御命令がありました。そこで今度は全く其御命令に服従して有のまゝなる自分と所有の凡てを聖前に捧げました。而して私は信仰の力を以て一足飛びにヨルダン河を渡りました。其時に私は言ひ知れぬ無限の靈通を感じまして長い長い間の大謬見から覺醒しました。私は覺えず聖前にひれ伏して傲慢なる此膝も何時しか恵の座に跪いて居りました。唯もう溢るゝ計りの喜悅をもつて涙は止め度もなく頬に傳はり、上天に向つて我救はれたる事を感謝して居りました。茲に於て積年の痼疾は全く癒されて了ひました。ハレルヤ、私は是迄神よ願くは罪から私を救ふて下さい、煩悶不平を拭ふて下さいと祈りました。其の時に神はそれなら唯今お前の命を献げよ、自分を潔めて貰い度いと云ふ此惠を受けるのは命懸けであるぞよと仰せせられた時に、臆病なる私は戰慄しました。怖れました。私共は命あつての物種だ、命あつてこそ色

々な面白い事にも會はれるのだ。生命がなくては何事もゼロになつて了ひます、命だけは差上げる事が出来ませんそれだけは御勘辨をと尻込みを致しました。此僅かな五十年の人命、塵の如き世樂以上に無限の生命、絶對の天樂ある事を知らなかつたのであります。何と云ふ耻かしい淺間敷い事でありましたらうか。あの密の流るゝカナンの地を占領する迄緊張して前進して行く事が出来ず、河の手前で腰を下ろして漠然たる砂漠の蜃氣樓に迷ふて居た弱虫です。今カナンの土地から自己の彷徨して居たヨルダン河のあなたをふり返りて見ますと愚かな私はあの隊商が蜃氣樓を追ふて走る様に唯自己の幻影に眩惑し、夢中の自己を觀じて居りました。従つて自己の周圍にあつた物も幻影であつたのですが肝要なカナンの土地へ行く目的は何時しか忘れて唯あの蜃氣樓に憧憬して居りました。何と云ふ極痴なあはて様ではありませんか。唯信せよと仰せられた聖い御言葉に頼る其信の力を以て一躍蹴然ヨルダン河を渡り驅け足で只一氣にカナンの土地に着いて私は始めて其處に心靈上に翳す雲もなく、我天の碧空に清暉照り互る御榮の聖國を見出しました。而して私は世の人の怪しむ計り「オーこは天の如し」と絶叫しました。是が昨日迄失戀の奴隸、懷疑の虜となり糞土の重荷を負ふて不平不満のサタンから人生の陷穽に突き落されて、困絶悶絶の悲鳴をあげて居た罪

人の首なる死刑囚の私の口から洩れ出で来たとは何と云ふ不思議、何と云ふ奇跡でありませふか！今ではあのいまましい死の暴風も罪の黒雲も何處へやら吹飛ばされて朝日さやかに照り輝く大空を眺むるの時、榮の聖國より來る歌は豊かに耳に響き百花爛漫たる聖國を望んで「オーこは天の如し」と讚美して居ります。ハレルヤ

實に無神無宗教者を改心せしむる者は書かれたる文字ではなくて活ける文字であります。我恩師大澤先生！私は神が貴師の手を通して此瓦器にも寶玉を盛り給へる晴れやかな御聖業を感謝讚美せずには居られません。罪人の頭であつた私は只キリストの十字架が未來迄永遠の誇です。今や私は生死の分水嶺に立ちて我前途に展開せらるゝ天國の道を明かに認める事が出來ました。何と云ふ偉大なる恩寵でせふか！何と云ふ絶大な光榮でありませふか！

嗚呼神は愛なり、神は愛なり！

九州崎陽の獄舎の一隅に神を悦べる死刑囚

山口 裕の謹詞

是れは私の信仰生活に於ける神を讚美した聲です。至誠已み難く一編證詞となりました。中畧

度々御心に懸けられ御親情ある御手紙、實に難有何時も感謝の祈を以て拜誦して居ります。外に御願申す事はありませんが私は息の續く限り否永遠不斷に聖書を讀んで純基督教を知り度いのです。先生どうか私を憫んで此研究の便宜な書籍やら信仰上の書籍を御惠送下され度いのです。下略

(是は死刑執行の前日にて彼は元より其事を知る由もなければ此手紙は常のよりもズット長く感謝に溢れた證詞であつた。)

感想

山口氏の事につき私へ何か申様との事でありませうから、其動機として申上ます、私は或る使命によつて大阪控訴院長谷田様のお宅に寄寓いたして居る者で御ざりますが、一日私を御來訪して下さるお方がありましたのでお目にかゝりますと、未知のお方でありませうから御來意を問ひますと、本書血汐の主人なる山口氏の遺言を申傳へのため上京の途次お寄り下さつた大澤牧師でありました。

未知のお方ではありますが山口氏の件に就ては本人の遺言として最後の状況を御通知して頂いた御縁故がありましたので靈的には知遇を得て居りました。それで山口氏の事につき其遺稿且つは遺言として傳へらるゝことを伺へば今更目の當り見る如く層一層感を深ふせしめられたので御座ります。私と山口氏は同氏が將に人界を去りて、其信仰上永遠の生命に向つて旅立せむさする時、即ち人間の裁判官に依て死刑の宣告を受け、現世に於ける最後の瞬間の來るのを待ちつゝありし時、偶然な原因で唯だ一回だけ文通を爲したに過ぎないのでありますので、同氏の性格や來歴などは同氏自身の書かれたものに依て想像するのみであります。さりながら唯一回の文通も非常に意義あるものであつて本書の未尾氏の絶筆にもあります様に現世來世を通じて永久生命の交誼を結んだとも言ひ得るでありませう。大阪控訴院長殿が司法省監獄局長であられました當時、彼の社會を驚かしたる有名な犯罪者山田憲事、死刑臺上の人たるの日も旬日ならんさします時、犯罪者の肉靈の救濟事業に熱心活動しつゝ、あられます、友なるマクドナルド女史が、其身は婦人にありながら、異郷なる我が國のしるも聞くだに恐ろしき犯罪者の靈肉を慰め救はむとの志から彼の山田憲を訪問せられた記事が當時の新聞に賞讃された事がありました。谷田監獄局長其事につきて申されますには、此の世に於て何の求むる所なく目前死と言ふ問題より外にない彼に對して誠眞誠意美しき同情を以て慰安の訪問をせられたマクドナルド女史の如きは眞に宗教を活用した人格者であると言ふ説を承りましたが、其記憶の新なる時でありました、一夕平和な家

庭團樂の話題中、谷田局長殿から偶々山口爺氏の一文章を讀み聞かせられました、文章も相當教育を受けた人と感じられました、今や此世を去らむとする罪人の聲として其決心並に悔改等、優しき節がありまして、正しく靈界に向つて進み行く、向上の性格が偲ばれ、悔の涙と法悦の情が裏面にかくれ居る事を感じさせられました。故に前記マクドナルド女史の徳に教へられ、局長殿に許可を得まして、神々キリストの思召として、山口氏へ一書を認め左の讃美歌を以獎勵、死は以て人界より靈界に榮轉する天國の門であつて、人界各種の止みの難き情慾の羈絆を脱かれて、本來人類に神から與へられた素志が肉体の煩ひより解き放たれ、自由自在の向上の靈界に向つて突進する意味でありませう。主の十字架こそ眞の救にして此上なき慰めであることを申贈りましたところ、それは不思議にも絞首臺上の人とされる間近き日でありまして山口氏は其命が旦夕に迫りつゝあるのを感じられしか否か感謝の返信細々と認めて來ましたのは其死の前日キリストイ時でありまして私の手に入りましたのは既に氏は上天即ち絞首臺に立たれた後でありました。私が山口氏へ贈つた文中の讃美歌は此の數節でありました。

讃美歌

二百四十九

- 1、主よ御もさに近かつかん
ありともなご悲しむべき
 - 2、さすらうまに日はくれ
夢にもなをあめのぞみ
 - 3、主のつかひは御空に
まねきぬればいざのぼりて
 - 4、目さめてのち枕の
いよ、切にたへつゝぞ
 - 5、うつし世をばはなれて
いよ、近く御もさに行き
- 同
- 1、や、にうつり來し夕日かげの
のこるわが命今か消ゆらむ

感想

折返し 御使よ翼をのべ永久の故里へのせゆきてよ永久の故里へのせゆきてよ

2、御國へ入る日も近づくらし つばさ打ちかわす音のきこゆ

3、むかへの使はあもりくらし 翼打ちかわす音のきこゆ

4、此身を救ひて死にたまひし 主にまみゆる日ぞただまたる

此讚美歌は、クリスチャンの折にふれて歌ふ讚美であります。山口氏に取つては一層意義を深くせらるゝであらうと撰んだのであります。實に氏の信條は價あるものと云ひ得るでありませう、此世に於ける其犯罪行為が如何に重大であつたにしましても、眞實眞正の悔改は肉体的死の必要さへもないでありませう、司法權を重んずればならぬ事は律法上止みがたき事といはしても法規上には尙控訴上告を進み行く道もありませう、人情として誰か生の執着をまぬがれ得ませふ、聞きます所に依りますれば氏が眞の悔改を知つた同情者且つは辯護士の方々から控訴の件を幾度も勧められましたにもかゝらず神キリストの命令として斷然覺悟せられた事を知る事が出来ました。氏が其決意を固うして正に刑臺上の人たらんとせられし折、其恩師大澤牧師の立會を許るされましたそうでありませう、小妹の贈りし聊の慰安に對し牧師に遺言されて他日御面會下されて最後迄の經過と永遠の生命に對する感謝と信仰とお傳へ下さいと申されました事を取敢へず大澤牧師より氏の最後に就いて詳細御通知下さいまして他日面會の日のある様祈る旨申送り下さいました。氏が絞首臺上の人となられし刹那迄も從容として最終の光榮ある人格を發起せられた事の事でありませう。承るごころによりませうれば山口氏の遺稿に同情して出版事項につきて物資其他につきて御盡力下さる御方ありと聞きまして故人の靈は申までもなく神のキリストもごんなにお悦びでありませう。薄情の私もありのまゝを申上げて故人の心根を讚美する次第で御座ります。終りに希望いたします複雑なる今日の世に山口氏の信念が益するごころ多い事を信じて祈るもので御座ります。

大阪控訴院長谷田三郎殿の檢閲を受けて
大正十年十一月十九日認む

石井濱

編者の附言

此春友人 大澤牧師より山口氏の事を聞き、私の編輯して居る雑誌の聖潔の友に一寸出したのが縁故となり、其後氏の死後、同氏自筆の懺悔録や、大澤牧師に宛てた手紙、及び同氏が裁判長に差出した陳述書の寫しなどを、同牧師が私に見せる爲に送つてよこされた。私は其を見て感ずる所あり、七月の傳道號に「死刑囚山口詮悔改願末」を記して殆んど全紙を埋めた。其號が大々的歡迎せられ、多數部餘分に印刷したに拘らず、忽にして一部も残らず出て終つて多くの注文者に失望を與へた。其後あれをモット詳しくして書冊にしたらと勧める者が多くあり、遂に大澤牧師及び小兵士團の伊藤牧師と共に協り、私が編輯して出版する事になつたのであります。編輯といつても、大部分は本人自筆の懺悔録の要点を抜萃して、然るべき体裁に書き替へただけであります。終に附加へた大澤牧師の話は、時日がない爲め同氏の許に送つて校閲を経る事が出来なかつたのですから。若し事實に少しでも間違があつたことすれば編者の責任であります。

私は彼の懺悔録を書き終つて先づ思ふ事は、惜しい人間であつたのといふ事である。彼の懺悔録は本書に抜萃した數倍のもので、半紙に細字百二十三頁あり、省いた中にも和漢洋の故事や格言など引用してあり、獄中に於て一冊の参考書もなくてあれだけのものを立派に書き上げたのを見れば、相當の智識と文才を有して居たと謂はねばなるまい。尙裁判長に差出した陳述書の寫しなどを見れば、一角の見識を有つて居

た人物である。教育の思慮もない多の鼠賊等と類を同うすべき者ではなかつた。然るに彼が罪もあらふに、強盗殺人といふ大罪を敢て犯すに至つたのは何故であるか。彼の意志の弱かつた爲に、不圖した事から罪に深入り、遂に自暴自棄に陥つた爲である事は無論であるが、彼をして其處に至らしめた徑路環境に就ては、ひとり宗教家のみならず、世の教育家及び經世家も亦大に注意すべきものがあると思ふ。家庭の訓育の大切なる事、友人の撰擇の必要なる事等は言はずもがな、彼が失戀の爲に心荒んで居た時に、若し誰か彼を慰め導く者があつたなれば又彼が一度身を誤つた後に於ても、社會が出獄人といふ憐れな失敗者に今少し同情を有つて居たなれば、斯く迄に墮落はせなかつたであらふなと思はれる。彼が陳述書に記した社會組織の欠陥を指摘しての意見など、私も大に共鳴せざるを得ない。私は何も「鳥の將に死せんとするや其鳴く聲や悲し、人の將に死せんとするや其いふ言やよし」といふ言古した言によつて、かくいふのではない、憾むらくは是が獄中よりの叫であるが故に何等の權威もないが、もし彼に語るべき處を得させたならば、堂々たる議論として人々を傾聽せしめたであ

らふ。ア、可惜有爲の人材を葬り去るものは罪である。いかに氣慨があり、又見識があつても罪を抱く者の人格は破壊せられ、腐蝕する。然ど神を信する者は意志を強くせられ、如何なる誘惑に面しても之に勝つる能力を與へられ、如何なる境遇に陥りてもよく自分を守る力を賦けられる。そして社會組織の缺陷や現世の不公平や矛盾を見ても、徒らに憤慨したり、淺間しくも自暴自棄に陥つたりなごせない。未來を望み、基督の再臨によりて出現すべき黄金時代を待臨んで、かゝる中にありても神の光榮と自己の人格建築の爲に力を盡して働くのである。山口氏の青年時代に與へたかつたのは、此徹底せる信仰である。

次に思ふ事は、彼の上に臨んだ神の恩恵である。神は「一人の亡ぶるをも欲み給はず、凡の人の悔改に至らんことを欲みて永く忍び給ふ」。彼如き大罪人をも救はんと、懇ろに導き給ふた事を思はせられる。初め獄中に於て基督教書類を研究し、次に不圖した事より教會の門を叩きて教を受けた事もあり、三度目に路傍説教に感じて遂に悔改むるに至つた。但し其時には未だ眞に救の恵を體驗する事が出來ず、以來努力修養

したが徹底するを得ず却て墮落した彼は更に兇惡なる者となりて大罪を犯した。而かも神は尙も彼を見捨て給はず、神戸の監房に於て神の囁きをきいて自白せねばならぬやうになつた。そして自白した彼は心に平和を得た以來煩悶もあり疑惑も起つたが、短日月の中に其信仰長足の進歩をなし、其心靈は日に々恩恵に肥れ太り、獄中に於ても宛然天國に居るが如く、未來の希望に輝いて従容自若として死に就くを得たのである。彼の懺悔録には其文章熟達せる爲に、幾分街つて居るのではないかと思はるゝ節もあるが、彼の手紙に見れば彼の有の儘の心持が見えて其疑は消れる。彼の記録や手紙の中に憤慨の口吻を漏らしたりなごする人間味の強さは見ゆる。然し彼は漸く眞の救を握つた許りの靈界の嬰兒に過ぎぬ。信仰生活多年の成熟せる聖徒の徳を彼に多く期待する事は無理である。時に強い人間味の表はれて居る處に却て其證明の眞實性があると思ねばならぬ。私は彼が死んだ事は却て恵であつたらふと思ふ。彼がもし控訴をなし、何等かの恩典によりて他日再び娑婆の風に吹かるゝやうになつたならば、彼はいかになつたらふ。彼には墮落の可能性はまだ強くあつた。世には在監中著

しき悔改めをなした大罪人で、出獄後救を全うせない例が折々ある。彼が恩恵を受けた事の確實なる事は、彼が死刑の恩旨に叛きたる事を耻ぢ、又殺害したる人の遺族を思ふて、神よりの正當の報として潔く服罪して控訴せなかつた事によりて明白に證明せられた。神は彼に喜んで死ぬる力を與へ給ふたのだと謂へやう。彼も聖書に所謂「其肉体を滅し其靈をして主イエスの日に救を得しめんと定」められた者であつたであらふ。

私は筆を擱く前にその偉大なる救の力の故に神を讚美せずには居られぬ。

「キリストイエス罪人を救はん爲に世に臨れり、信すべく亦疑はずして納べき話なり」

「凡て（誰にても）之を信する者に亡ることなくして永生を受けしめんが爲なり。」

大正十二年五月十日印刷
定價金六拾錢
大正十二年五月十四日第三版發行 他に送料を要す

編輯者 米田 豊

島根縣松江市雜賀町六八三番地
發行人 伊藤 馨

島根縣松江市片原町八十三番地
印刷所 廣江活版所

島根縣松江市雜賀町六八三番地
發行所 小兵士團
番替穴版二三三七八番

290
265

終

